

京都府京田辺市

天理山古墳群発掘調査報告書

2022

京 田 辺 市

天理山古墳群発掘調査報告書

京 田 辺 市

巻頭図版第1 天理山古墳群



天理山3号墳北側くびれ部（3—3 tr） 墓輪列検出状況（西から）

卷頭図版第2 天理山古墳群



天理山4号墳填頂部（4—4tr）水銀朱検出状況



天理山3号墳北側くびれ部（3—3tr）円筒埴輪 No. 2

序

京田辺市は、東に木津川、西に生駒山系に連なる甘南備山が控えるなど、豊かな自然環境に恵まれたまちです。古くから交通の要衝である本市においては、一休禅師が晩年を過ごした寺として知られる酬恩庵一休寺や、国指定史跡である大住車塚古墳など、豊かな歴史が築かれてきました。

このたび調査を実施しましたのは、酬恩庵一休寺の裏山に位置する天理山古墳群です。これまで未調査でありましたが、今回の発掘調査により2基の前方後円墳と1基の前方後方墳で構成される古墳群であることが明らかになりました。この成果は、京田辺市の歴史を考える上で非常に貴重な成果であります。

今回、天理山古墳群の第1次発掘調査の成果をとりまとめ、刊行することといたしました。発掘調査をはじめ、報告書の刊行にあたり、京都府教育委員会をはじめとする多くの方々にご協力・ご指導を賜りました。深く御礼申し上げます。本書が広く利用され、地域の歴史文化への理解を深める一助となれば幸いです。

今後とも、文化財の保護と普及に全力を尽くす所存でありますので、変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和4年3月

京田辺市長 上村 崇

例　言

- 1 本書は令和3年度に京田辺市が実施した、京田辺市薪山垣外における天理山古墳群発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆は、当市職員以外に、調査に協力頂いた京都府教育府指導部文化財保護課職員に依頼した。文責についてはそれぞれ文末に記し、編集は桐井が行なった。また、理化学分析については一般社団法人文化財科学研究所に依頼し、金原裕美子氏から原稿を賜った。
- 3 調査を実施するについて、株式会社中野興産には多大なるご協力とご支援を賜った。ここに記して感謝の意を表します。
- 4 本書に掲載した地図は、本市発行の都市計画図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト（<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp>）に掲載する文化財G I Sデータを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。
- 5 本書で使用している測地系は新座標（国土座標2000、平面直角座標系第VI座標系）である。
- 6 今回の調査で出土した遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、京田辺市で保管する。
- 7 遺構写真は当市職員が撮影した。
- 8 出土遺物写真は、地域文化財研究所に撮影を委託した。
- 9 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の機関・個人に多大なる協力を得た。記して御礼申し上げます（順不同、敬称略）。
諫早直人、一瀬和夫、井上満郎、伊野近富、梅本康広、絹島歩、木許守、京都府教育府指導部文化財保護課、國下多美樹、古閑正浩、坂井秀弥、柴原聰一郎、鈴木郁哉、田中秀弥、豊島直博、長友朋子、林正、原田早季子、原田昌浩、東影悠、菱田哲郎、廣瀬覚、吉永健人、若林邦彦

目 次

1 はじめに.....	1
2 位置と環境	
(1) 自然環境	2
(2) 歴史的環境	2
3 調査の概要	
(1) 1号墳の調査	6
(2) 3号墳の調査	13
(3) 4号墳の調査	27
(4) 周辺の調査	32
4 理化学分析.....	36
5 考古学的検討	
(1) 墳丘構造の復原	38
(2) 天理山古墳群と木津川左岸の前期古墳の編年的位置付け	41
6 まとめ.....	44

挿図目次

都府教育委員会2022より) 42

第1図 天理山古墳群の位置	1
第2図 周辺の遺跡	3
第3図 天理山古墳群全体図	5
第4図 1号墳調査区配置図	7
第5図 1-1 tr平・断面図	8
第6図 1-2 tr平・断面図	9
第7図 1-3 tr平・断面図	10
第8図 1-4 tr平・断面図	11
第9図 1-5 tr平・断面図	11
第10図 3号墳出土遺物実測図	12
第11図 3号墳調査区配置図	14
第12図 3-1 tr平・断面図	15
第13図 3-2 tr平・断面図	16
第14図 3-2 tr葺石検出状況平・立面図	17
第15図 3-3 tr平面図	18
第16図 3-3 tr埴輪(No.2)断面図	18
第17図 3-4・5tr平面図	19
第18図 3-4・5tr断面図	20
第19図 3-5 tr埴輪柄SX02検出状況	20
第20図 3-6 tr平・断面図	22
第21図 3号墳出土埴輪実測図1	23
第22図 3号墳出土埴輪実測図2	24
第23図 3号墳出土土器・土製模造品実測図	25
第24図 4号墳調査区配置図	28
第25図 4-1 tr平・断面図	29
第26図 4-2 tr平・断面図	29
第27図 4-3 tr平・断面図	30
第28図 4-4 tr平・断面図	31
第29図 2号墳周辺の地形と調査地	32
第30図 2-1 tr平・断面図	33
第31図 2-2 tr平・断面図	34
第32図 2-3 tr平・断面図	34
第33図 2-4 tr平・断面図	35
第34図 測定試料1と測定試料2	36
第35図 赤色顔料試料	37
第36図 4号墳の墳丘	38
第37図 1号墳の墳丘	39
第38図 3号墳の墳丘	39
第39図 3号墳の墳丘復元案	40
第40図 周辺の古墳で出土した埴輪・土器・土製品	41
第41図 京都府南部の古墳と緩喜古墳群の位置(京	

付表目次

付表1 墓輪観察表 47

巻頭図版目次

天理山3号墳北側くびれ部(3-3 tr)埴輪列検出
状況(西から)

天理山4号墳頂部(4-4 tr)水銀朱検出状況

天理山3号墳北側くびれ部(3-3 tr)円筒埴輪

No.2

図版目次

天理山1号墳

図版第1 (1) 1-1 tr(北から)
(2) 1-2 tr(西から)

図版第2 (1) 1-3 tr土層断面(北東から)
(2) 1-4 tr全景(北から)
(3) 1-5 tr土層断面(北西から)

天理山3号墳

図版第3 (1) 3-1 tr(北西から)
(2) 3-2 tr(西から)

図版第4 (1) 3-2 tr(西から)
(2) 3-3 tr(東から)

図版第5 (1) 3-3 tr埴輪列断割(北から)
(2) 3-3 tr埴輪No.2(北西から)
(3) 3-4 tr(北東から)

図版第6 (1) 3-5 tr(北東から)
(2) 3-5 tr埴輪柄

天理山4号墳

図版第7 (1) 4-1 tr(北東から)
(2) 4-2 tr(北東から)
(3) 4-3 tr(西から)

図版第8 (1) 4-4 tr(南西から)
(2) 4-4 tr(南西から)
(3) 4-4 tr(東から)

天理山2号墳・周辺の調査

- 図版第9 (1) 2-1 tr (東から)
(2) 2-2 tr (北から)
(3) 2-3 tr (南から)
- 図版第10 (1) 2-4 tr (北から)
(2) 2-4 tr断割後 (北から)
(3) 2-4 tr断割内 (西から)

出土遺物

- 図版第11 (1) 1号墳出土埴輪
(2) 1-1 tr出土家形埴輪
(3) 1-1 tr出土家形埴輪
- 図版第12 (1) 3号墳出土円筒埴輪
- 図版第13 (1) 3号墳出土朝顔形埴輪
(2) 3号墳 (3-5 tr) 出土埴輪
(3) 3号墳出土埴輪
- 図版第14 (1) 3号墳3-2 tr出土土器
(2) 3号墳出土土製品
(3) 4号墳 (4-4 tr) 出土土器

1 はじめに

天理山古墳群は、京都府京田辺市薪山垣外に位置する古墳群である。昭和33年（1958）の田辺郷土史会（現京田辺市郷土史会）による踏査で発見された古墳で、円墳4基からなる古墳時代中期～後期の古墳群と考えられてきた。平成30年度、遺跡地内を含む丘陵一帯で開発行為が計画され、令和2年度に文化財保護法93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。そのため、令和3年度京田辺市が試掘調査を行ったところ、前方後方墳1基、前方後円墳2基の3基からなる古墳群であることが判明した。特に天理山3号墳は京田辺市内でも最大級の規模であり、その遺存状態も良好であることから、令和3年5月19日に開催された京田辺市文化財保護審議会にて、地内全域の保存を目指す意見書が提出された。そのため開発業者と保存に向けての交渉を行い、古墳および古墳が立地する丘陵全体を保存することで合意した。また令和3年7月10日に開催した現地説明会では、市内外から計137名の参加を得た。

本報告は、令和3年4月14日から5月28日にかけて実施した第1次調査及び、令和3年6月23日から7月30日にかけて実施した第2次調査の成果である。なお、調査に係る費用は第1次調査は株式会社中野興産、第2次調査は令和3年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金を利用して京田辺市が負担し、土砂除去作業及び図化作業は株式会社島田組に委託した。

遺物の整理作業は令和3年度に京田辺市市民部文化・スポーツ振興課が行った。報告書の執筆は、上野が中心に作成し、京都府教育庁指導部文化財保護課職員の協力を得た。現地調査・整理作業にご協力を頂いた機関、学識経験者の方々には心から感謝を申し上げる。
（上野）

《調査組織》

調査主体 京田辺市

調査責任者 京田辺市長 上村 崇

調査指導 京都府教育委員会・京田辺市文化財保護審議会

調査担当者 京田辺市市民部文化・スポーツ振興課文化振興係 主事 上野 あさひ



第1図 天理山古墳群の位置

2 位置と環境

(1) 自然環境

京都府南部の山城地域の中心部には、南北約20km、東西5～6kmの山城盆地が存在する。山城盆地は概ね南に高く北に低い地形をなしており、盆地の南北を木津川が貫流している。京田辺市から八幡市にかけての木津川左岸地域は、西部の丘陵地と北流する木津川がつくる東部の沖積平野とで構成される。西部の丘陵は奈良と大阪を隔てる生駒山地にまで連なる。丘陵は北から八幡市域を中心とした八幡丘陵、甘南備山付近を中心とした田辺丘陵、奈良県との府県境を中心とする平城丘陵などに呼び分けられる。また丘陵地からは複数の支脈が伸びている。

京田辺市の地形と地質はおおよそ5つに区分することができる。1. 西端部の硬い基盤岩(花崗岩)からなる生駒山脈北方の山地、2. 京田辺市の靈山古生層からなる甘南備山、3. これらの山地を除く男山丘陵から田辺丘陵に続く東斜面の古期洪積層(大阪層群、大住礫層)、4. その東縁部に細長く分布する東畠・尊延寺砂泥互層、5. その東方に広がる木津川の沖積地となる平野である。西側の田辺丘陵から東へと流れる河川としては手原川や普賢寺川があげられ、いずれも木津川に流れ込む。

天理山古墳群は北側の京都盆地、また木津川や東部へ眺望の開けた、西から東に傾斜の下がる田辺丘陵の東側に形成された古墳群で、標高はもっとも高い地点で約90mである。

(2) 歴史的環境

天理山古墳群が位置する京田辺市の歴史的環境を概観してみよう。

旧石器時代の遺跡としては市内南部の山間部地域に所在する高ヶ峯遺跡が知られており、サヌカイト製石核1点が出土している。縄文時代は、縄文時代中期末の薪遺跡が集落遺跡として知られており、隅丸方形の竪穴建物や土壙群などが発見されている。また、南部では三山木遺跡から縄文時代晚期の土器類が出土しているほか、三山木遺跡の南西に位置する山崎遺跡からは、明確な遺構は検出されていないが、石棒や異形石製品が出土している。

弥生時代になると、縄文時代に比べて遺跡数が増加する。市中部からやや北寄りに位置する稻葉遺跡では、方形周溝墓が検出されており、一辺約11.5mの規模を有する。周溝から出土した土器から、時期は前期後半のものとされる。他にも、宮ノ口遺跡、宮ノ下遺跡、三山木遺跡などで前期の遺構、遺物が確認されている。弥生時代中期では田辺城下層で竪穴建物が、南垣内遺跡からは16×14mの方形周溝墓が、市南部では南山遺跡から竪穴住居が16棟確認されている。後期になると飯岡遺跡や、銅鏡や鉄製品が出土した田辺天神山遺跡など、丘陵部で多く遺跡が見つかっている。

古墳時代になると、木津川流域では前期前半に椿井大塚山古墳、平尾城山古墳(ともに木津川市)が築造されるが、その後に続く首長墓はみられない。前期後半以降、京田辺市から八幡市にかけて前方後円墳や前方後方墳などが南北に細長く散在しながら分布し、古墳营造が活発化する。このうち首長墓とされるのは、京田辺市では大住の大住南塚古墳(前方後方墳、墳丘長71m)、同大住車塚古墳(前方後方墳、墳丘長66m)、興戸に所在する興戸1号墳(前方後円墳、墳丘長24m)、同2号墳(円墳、直径28m)、同市飯岡に所在する飯岡車塚古墳(前方後円墳、墳丘長87m)である。京田辺市



1 大住車塚古墳	14 番山遺跡	27 稲葉遺跡	40 興戸宮ノ前窓跡
2 大住南塚古墳	15 薩遺跡	28 東神屋遺跡	41 川原谷遺跡
3 岡村遺跡	16 郷土塚古墳群	29 尼ヶ池遺跡	42 興戸城跡
4 久保田遺跡	17 番山古墳群	30 河原遺跡	43 興戸宮ノ前遺跡
5 三木本遺跡	18 西山古墳群	31 鶴田遺跡	44 興戸庵寺
6 三野遺跡	19 堀切古墳群	32 竹ノ脇遺跡	45 興戸遺跡
7 志保遺跡	20 西薪遺跡	33 田辺遺跡	46 大切遺跡
8 塔ノ脇遺跡	21 城ヶ前遺跡	34 田辺城跡	47 南垣内遺跡
9 野上遺跡	22 天理山古墳群	35 田辺奥ノ城古墳群	48 草路城跡
10 地内山遺跡	23 小矢古墳群	36 興戸丘陵東遺跡	49 宮ノ後遺跡
11 猿谷遺跡	24 堤倉孫神社遺跡	37 興戸古墳群	50 田辺天神山遺跡
12 小林遺	25 茂ヶ谷遺跡	38 興戸丘陵西遺跡	51 野神遺跡
13 薩城跡	26 伝道林遺跡	39 酒壺古墳	

第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

内に活発に古墳が造られるのと同時に、八幡市内では石不動古墳（前方後円墳、墳丘長 88m）、茶臼山古墳（前方後方墳、墳丘長 50m）、西車塚古墳（前方後円墳、墳丘長 114m）、東車塚古墳（前方後円墳、墳丘長推定 90m）、ヒル塚古墳（方墳、一辺 52m）がそれぞれ築造される。これらの中でも大住南塚古墳、飯岡車塚古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳の埋葬施設には竪穴式石室が採用されるなど、古墳時代前期後半に木津川の水運に關係する首長の活発な造墓活動が行われる。古墳時代中期以降は飯岡車塚古墳が位置する飯岡丘陵で、ゴロゴロ山古墳（円墳、直径 60m）、薬師山古墳（円墳、直径 38m）、トヅカ古墳（円墳、直径 25m）が築造され、飯岡丘陵が前期から継続して古墳が造られた地域であることが窺える。

また天理山古墳群が所在する薪地区には、小欠古墳群や堀切古墳群をはじめとする多くの後期古墳群が所在する。小欠古墳群は天理山古墳群の南側に位置していた古墳群であり、3基の古墳から構成される。中でも小欠 1号墳は横穴式石室を持つ古墳で、副葬品として土師器の壺、須恵器の蓋付杯、高杯が出土している。また天理山古墳群の西側には 10 基の円墳と 10 基の横穴墓で構成される堀切古墳群が所在する。堀切 7 号墳は直径 15m の円墳でありながら、東海系の埴輪を樹立しており、活発な地域間交流が窺える。他にも、薪地区では平地でも埋没古墳である薪狭道 1号墳や薪高木 1～3号墳など、中期から後期にかけての古墳が造られ、薪地区においては丘陵だけでなく平地にも活発に古墳が造られていた様子が窺える。

京田辺市域は、古代の律令制下では山背（城）国綾喜郡に属する。飛鳥・奈良時代の遺跡としては、興戸遺跡が挙げられる。興戸遺跡は東西 0.7km、南北 1km の範囲に広がり、掘立柱建物群や土地区画に関連した遺構が見つかっている。また古代寺院としては興戸遺跡と重複する興戸廃寺や、市南部の三山木廃寺、普賢寺廃寺が、生産遺跡としては北部に交野ヶ原窯跡群（奈良時代）や松井窯跡群（奈良～平安時代）の須恵器窯が知られている。南部には、飛鳥時代末の須恵器窯である新宗谷窯跡や、奈良時代前期のマムシ谷窯跡が造られる。

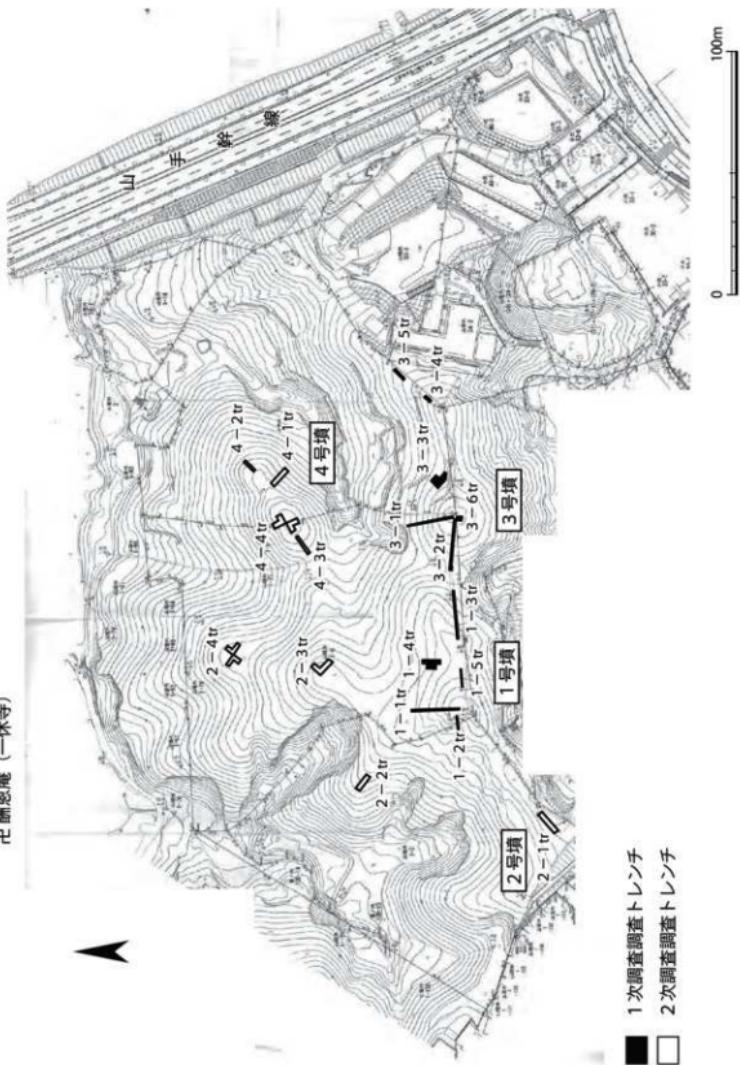
平安時代には、平安京造営の際に目印にされた甘南備山（標高 217.5m）の山頂付近に神奈備神社が祀られた。その東側の谷には『今昔物語集』にも説話がみられる神奈比寺が立地していたが、元禄 2（1689）年に薪山垣外に移され、今なお信仰され続けている。天理山古墳群の立地する丘陵の東麓には、延喜式内社である棚倉孫神社が鎮座するなど、祭祀や信仰に対して重要な地域であることが窺える。

中世には薪遺跡で在地領主の居館跡や園池の遺構を検出している。遺物は 13 世紀後半～14 世紀前半を中心とし、多量の土師器皿とともに白磁四耳壺、青磁盤等の優品が出土している。

中世後半から近世にかけて南山城跡や田辺城跡が造られ、田辺城跡では 15 世紀から 16 世紀にかけての堀切や石組遺構が検出されている。

（上野）

元勅願庵（一休寺）



第3図 天理山古墳群全体図 (1 / 2,000)

3 調査の概要

天理山古墳群は、踏査では古墳と認識されていたものの、発掘調査は行われていなかったため、今回の調査では、事前の測量調査で古墳の可能性が高いと判断した3箇所（1号墳、3号墳、4号墳）と、2号墳と推測される場所、およびその周辺で古墳の可能性がある地点で調査を行い、計19箇所のトレンチを設定した（第3図）。

（1）1号墳の調査

① 調査の概要（第4図）

1号墳は昭和34年（1959）の田辺郷土史会の踏査によって、後期の須恵器及び埴輪が採取されたと伝わる古墳で、埋葬施設として粘土椁が露出していると報告されていた（田辺郷土史会1959）。調査前に行った事前の測量からは、全長約60mの前方後円墳であることが予想された。

そのため、後円部の西側斜面、北側斜面、東側斜面、前方部東側斜面及び北側くびれ部と想定される位置に計5箇所のトレンチを設定して調査を行った。合計調査面積は約76m²である。

② 1—1トレンチ（第5図）

1—1トレンチは後円部墳頂から北側斜面にかけて設定した、幅1m、長さ20mの調査区である。ただし調査区北端から約1.2mの地点では木が茂っており掘削ができなかった。表土を取り除くと、褐色からにぶい黄褐色中粒砂の流土が堆積し（第3～12層）、第7層の黄褐色中粒砂は埴輪片を含む。流土層の下からはにぶい黄褐色から橙色のシルト質の地山（第13～18層）を検出した。地山は北へ向かって低く傾斜しているが、明確な傾斜変換点はなく、なだらかに傾斜していく。現地の地形と他の調査区の検出状況を考慮すると、標高86.5m付近が本来の地山を削り出した墳丘裾部であった可能性が考えられる。出土遺物は少ないが、円筒埴輪や標高87m付近では家形埴輪の破片（第10図5・6）が出土している。

③ 1—2トレンチ（第6図）

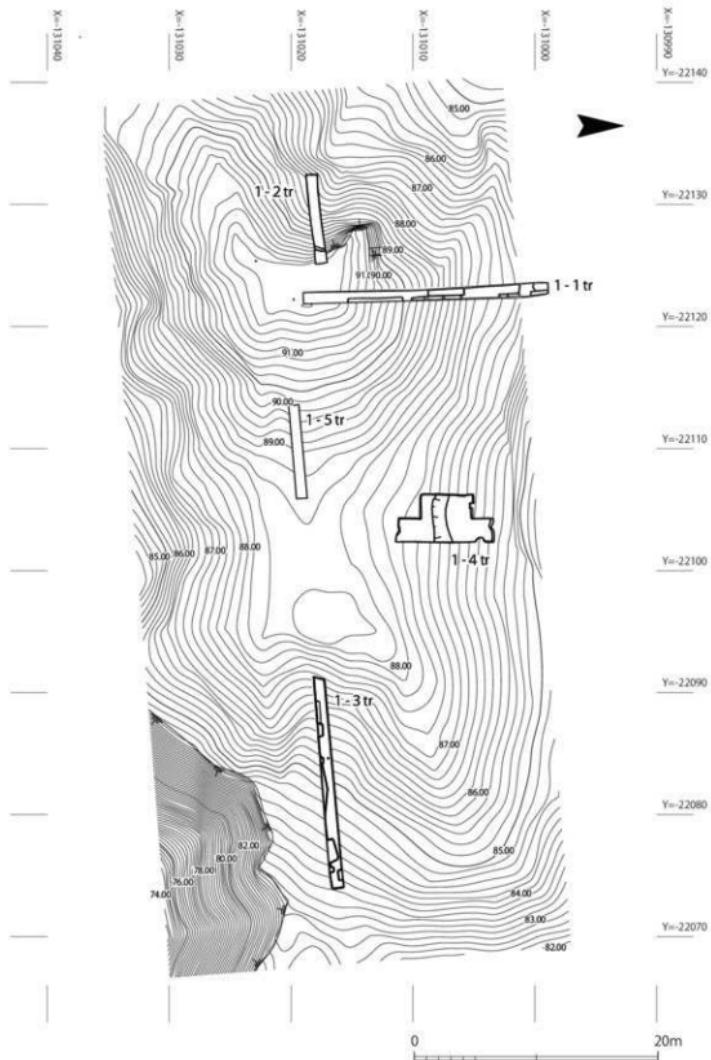
1—2トレンチは後円部墳頂から西側斜面に設定した、幅1m、長さ7mの調査区である。粘土椁が露出しているという記述（田辺郷土史会1959）があることから、調査区を設定し表土を除去し、精査を行ったが、顕著な土色変化を確認することはできなかった。遺物は出土していない。

④ 1—3トレンチ（第7図）

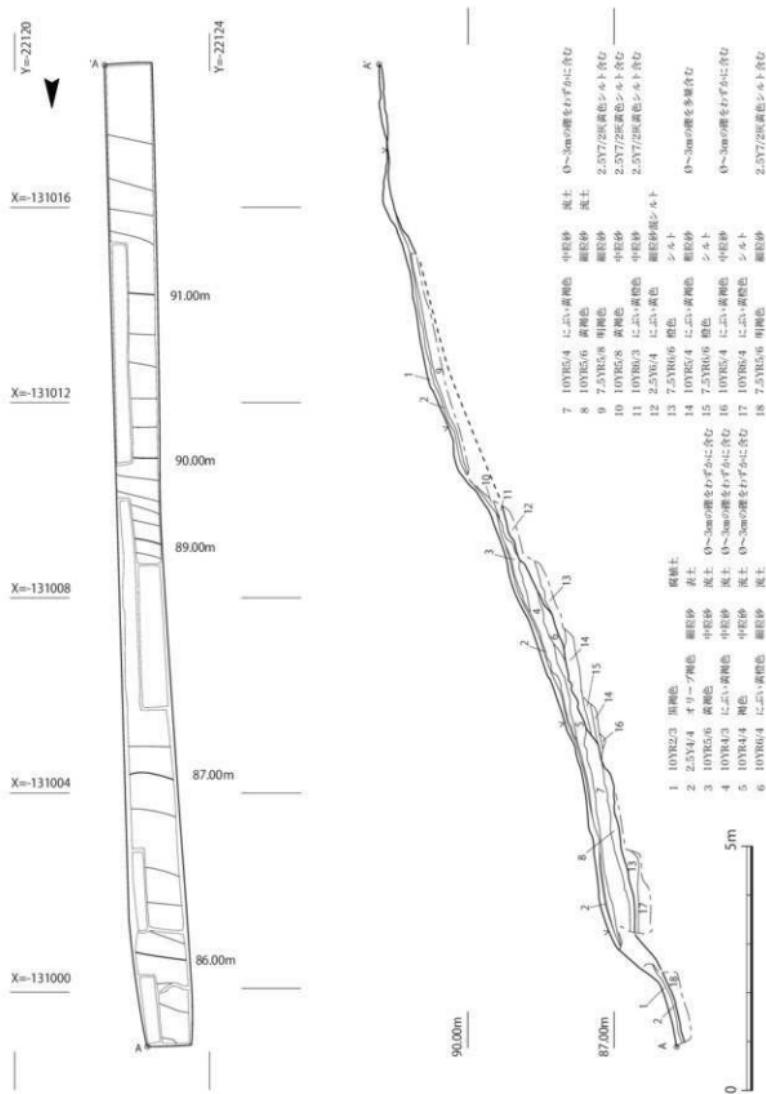
1—3トレンチは前方部東側に設定した幅1m、長さ20mの調査区である。調査区西側では表土直下に明褐色細粒砂の地山（第7層）を検出している。一方、調査区の大部分ではにぶい黄褐色細粒砂を中心とした墳丘流土が堆積し、その下層に地山が検出された。標高約84.5m付近で地山の傾斜変換点を検出した。調査区西側斜面の傾斜角が約18度であるのに対し、調査区中央付近で傾斜角が約10度に変化することから、この傾斜変換点は地山を削り出した前方部の裾部であると判断した。遺物は出土していない。

⑤ 1—4トレンチ（第8図）

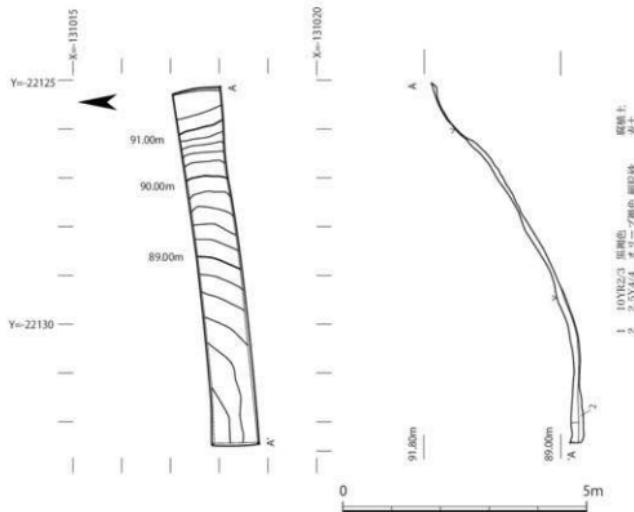
1—4トレンチは北側くびれ部に設定した幅1m、長さ8mの調査区である。調査区全体



第4図 1号填調査区配置図 (1 / 400)



第5図 1-1 トレンチ平・断面図 (1/100)



第6図 1—2トレンチ平・断面図 (1/100)

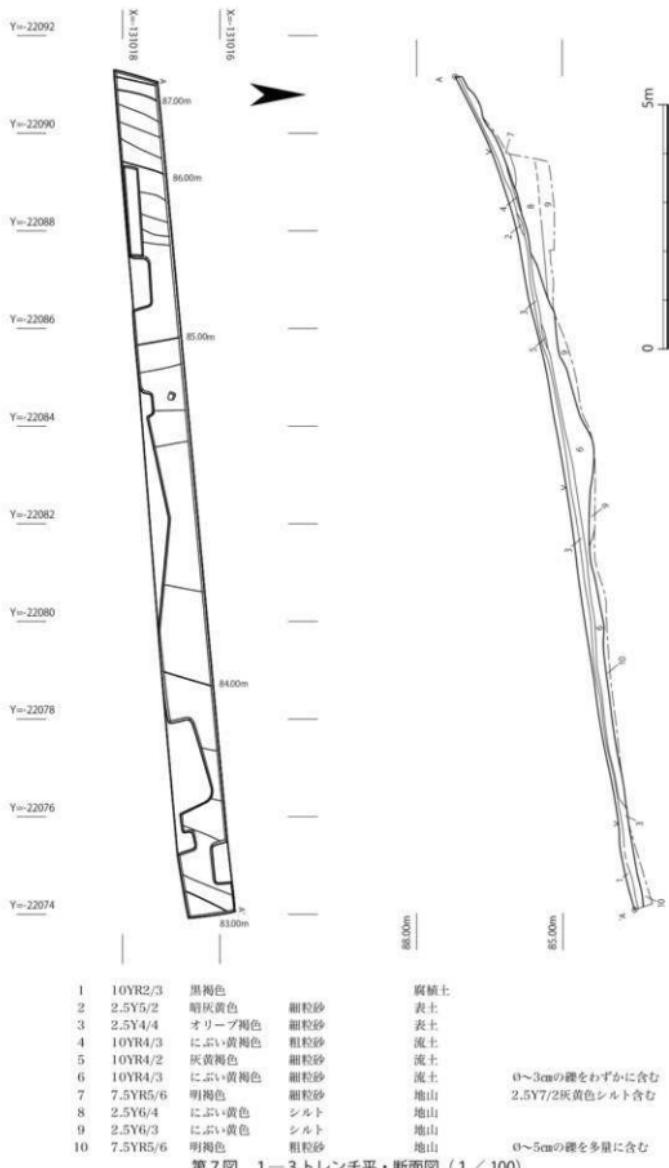
で、流土が堆積し、その下層から橙色中粒砂の地山を検出した。調査区内では、墳丘の平坦面および斜面を検出した。斜面と平坦面の境界は標高 86.8m、平坦面の検出長は約 2.9m、墳丘斜面は幅約 1.6m、墳丘傾斜角は約 15 度を測る。調査区内では 2箇所で地山の傾斜変換点を検出した。一箇所は調査区南東隅から北へ 3.2m の地点であり、標高は 86.8m である。そこから北へ約 15 度下り、標高 85.8m 付近でやや傾斜が緩くなる。くびれ部を確認するため、調査区を西へ幅 2m、長さ 4m の拡張を行ったところ、地山が屈曲する状況を検出したため、くびれ部であると判断した。第 3 層から円筒埴輪の破片が出土している。

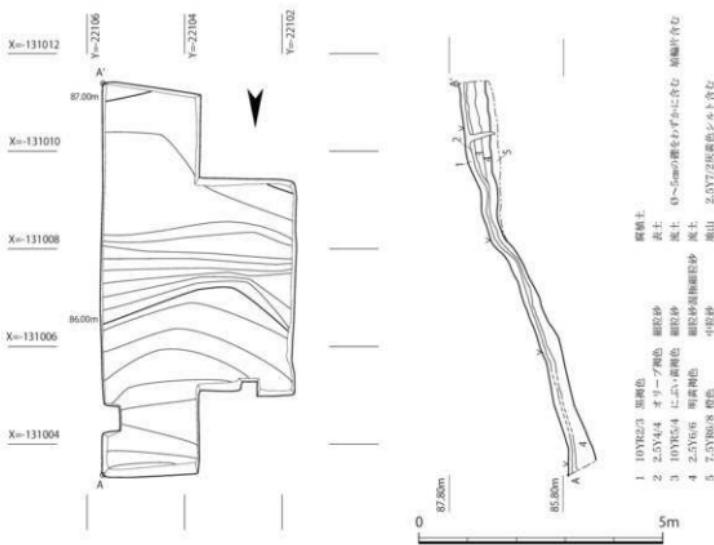
⑥ 1—5 トレンチ（第9図）

1—5 トレンチは後円部東側斜面に設定した幅 1m、長さ 8m の調査区である。調査区西側（後円部側）では、表土直下で黄褐色粗粒砂の地山を検出した。一方、前方部側では埴輪片をわずかに含む黄褐色細粒砂の墳丘流土（第 5 層）、礫を含む層（第 6～8 層）が堆積し、その下層に地山（第 11・12 層）を検出した。調査区中央の標高 87.5m 付近では、地山の傾斜変換点を検出した。調査区西側は地山の傾斜角度が約 16 度であるのに対し、調査区東側ではほぼ水平に検出していることから、この傾斜変換点は、地山を削り出して成形した後円部と前方部の接続部分である可能性が考えられる。第 5 層から円筒埴輪の破片（第 10 図 1）が出土している。（上野）

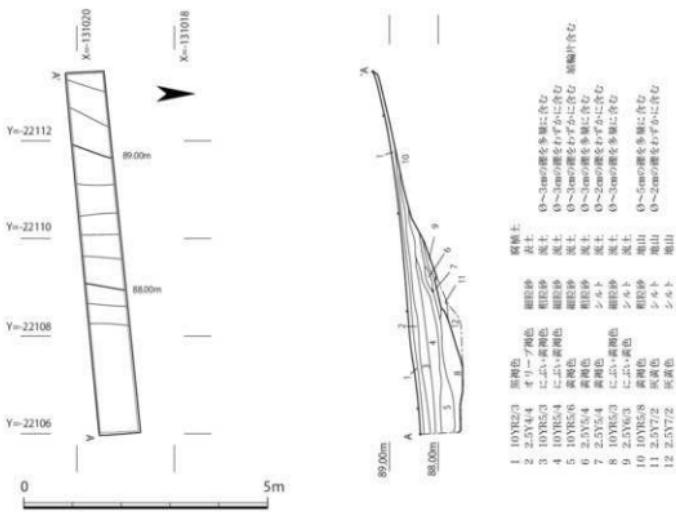
⑦ 出土遺物（第10図）

出土遺物はコンテナ 1 箱に收まり、すべて埴輪の破片資料である。図化できるものは数点のみである。普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が出土しているが、朝顔形埴輪は小片で図化できていない。報告

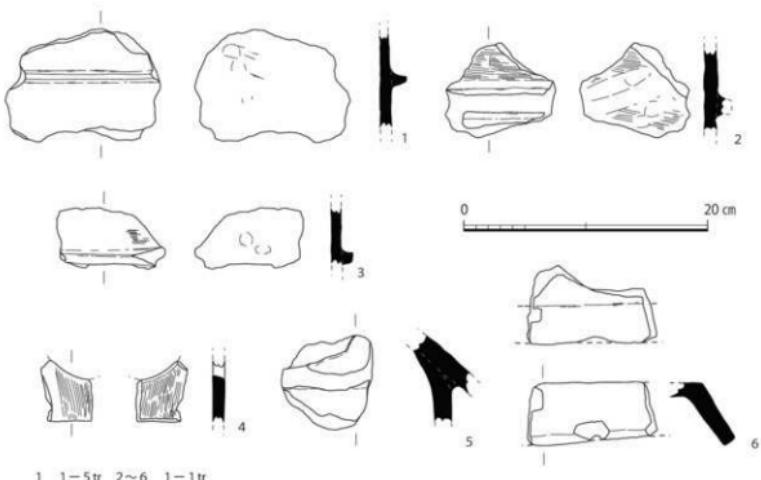




第8図 1-4 トレンチ平・断面図 (1/100)



第9図 1-5 トレンチ平・断面図 (1/100)



第10図 1号墳出土遺物実測図（1／4）

する胴部に関しては、朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪の差異を認識することは困難であり、ともに普通円筒埴輪として報告する。また、原位置に留めているものではなく、埴頂部からの転落したものと想定できる。1は1-5トレンチの第5層から出土した普通円筒埴輪の胴部である。外面は摩耗がはげしく、調整は不明であるが、内面にナデ調整とユビオサエの痕跡を確認できる。突帯は、突出度が高く、端面が狭い資料である。2・3は外面に静止痕のないヨコハケが認められる。2の内面は、ナナメ方向のハケ調整後に、ナデ調整とユビオサエを施している。3の内面は、ユビオサエのみが確認できた。ともに、突帯形状は、正方形であり、1と比較して、突出度が低く、端面は広いものである。4は外面・内面ともにタテハケを施している。透孔をもち、下半部のみであるが、丸みをもち、半円形か円形の可能性が考えられる。5・6は家形埴輪である。ともに1-1トレンチから出土した。5は屋根から壁体にかけての破片である。6は裾廻突帯の破片である。家形埴輪は全体の形状を復元できるものではなく、その全容は不明であるが、1号墳に家形埴輪が配置されていたことは明らかである。

1号墳の出土遺物は少なく、不明瞭な点も多いが、立地から周辺の古墳からの混ざりこみとも想定できないため、少量の埴輪が埴頂付近に配置されていた状況が考えられる。 (北山・上野)

⑧ 小結

調査の結果、1号墳は前方後円墳であることが判明した。後円部及び前方部の一部が著しく地形の変更を被っているため、正確な規模は不明だが、全長57m、後円部径39m、最大高6.5mに復元することができよう。また、いずれのトレンチでも盛土は確認できなかったため、地山削り出しで成形された古墳である可能性が高い。埴輪の出土は少量であり、前方部からは出土していないことから、

後円部の墳頂上に限って配置されていた可能性がある。また、葺石は検出されず、流土中にも転落石が認められなかったことから、葺石は墳丘築造時からなかったと考えられる。1号墳は出土した埴輪から、古墳時代前期後半頃の古墳であると考えられる。

(上野)

(2) 3号墳の調査

① 調査の概要（第11図）

3号墳は、田辺郷土史会の踏査によって発見された古墳で（田辺郷土史会 1959）、京都府遺跡地図では直径18m、高さ2~3mの後期の円墳とされている。しかしながら、事前の測量の結果、全長約80mの前方後円墳である可能性があったため、墳頂部及び後円部の西側斜面、北側斜面、前方部東側斜面及び北側くびれ部と想定される位置の計5箇所のトレンチを設定し、調査を行った。調査面積は約88m²である。

② 3-1トレンチ（第12図）

3-1トレンチは墳頂部から北側斜面に設定した、幅1m、長さ19.4mの調査区である。当初調査区全面で掘削を行い墳丘面を検出する予定であったが、調査期間の都合上、墳丘裾部を確認することを優先し、調査区北側を中心に掘削を行った。

墳頂部付近では表土直下に橙褐色土（第11層）を検出した。一方、調査区北側の墳丘斜面では埴輪片を含む墳丘流土（第3~5層）が厚く堆積し、その下層に地山（第7~10層）を検出した。また、第5層は直径7cmの礫を多く含む。

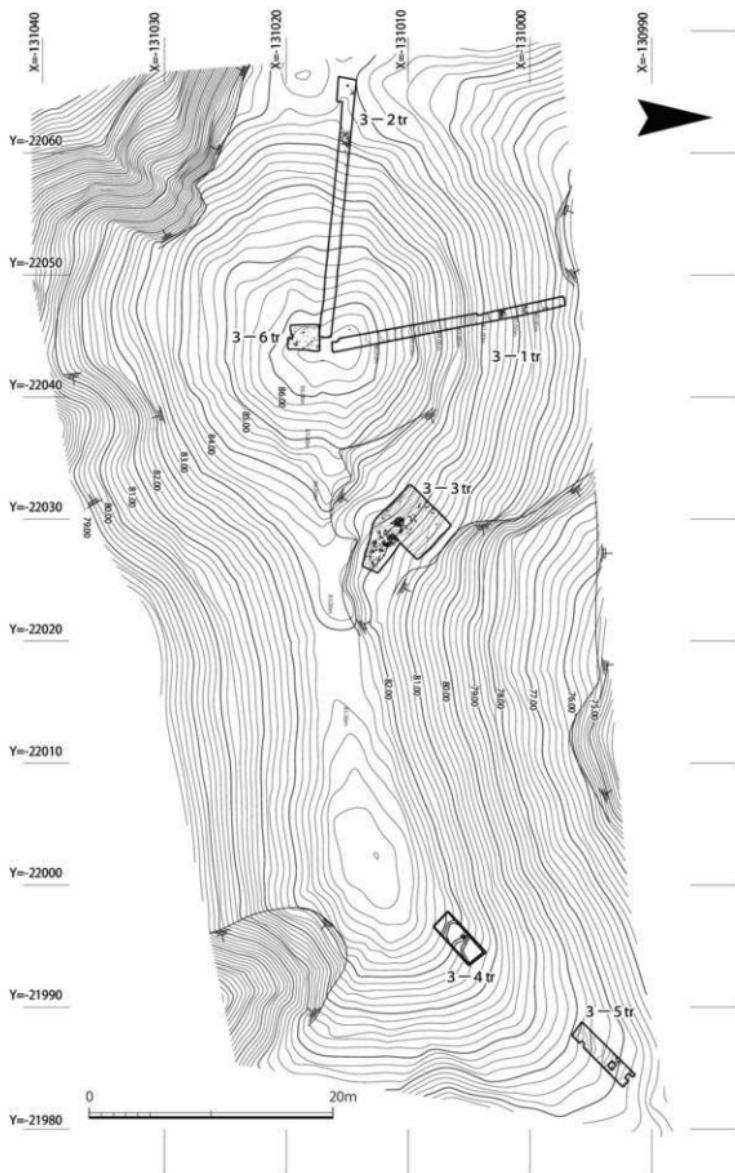
調査区北端から南へ約5m、標高約81.4mの地点に長さ約1.2mを測る平坦面を検出した。平坦面には直径約15cmの石材を確認し、石材は平坦面に埋め込むように配置されている。流土中には転落石が含まれていないことから、少なくとも墳丘2段目斜面には葺石を使用せず、平坦面に石材を置いていると考えられる。平坦面から北側へ掘削を進めると、標高81mの地点で地山の傾斜変換点を検出した。地山はそこから北側へ下がり、墳丘はさらに北側へ続くと想定されるが、現地の状態からさらに北側への掘削は困難であると判断したため、墳丘裾部は確認できていない。出土遺物は主に第3~5層で埴輪の破片が出土している。

③ 3-2トレンチ（第13・14図）

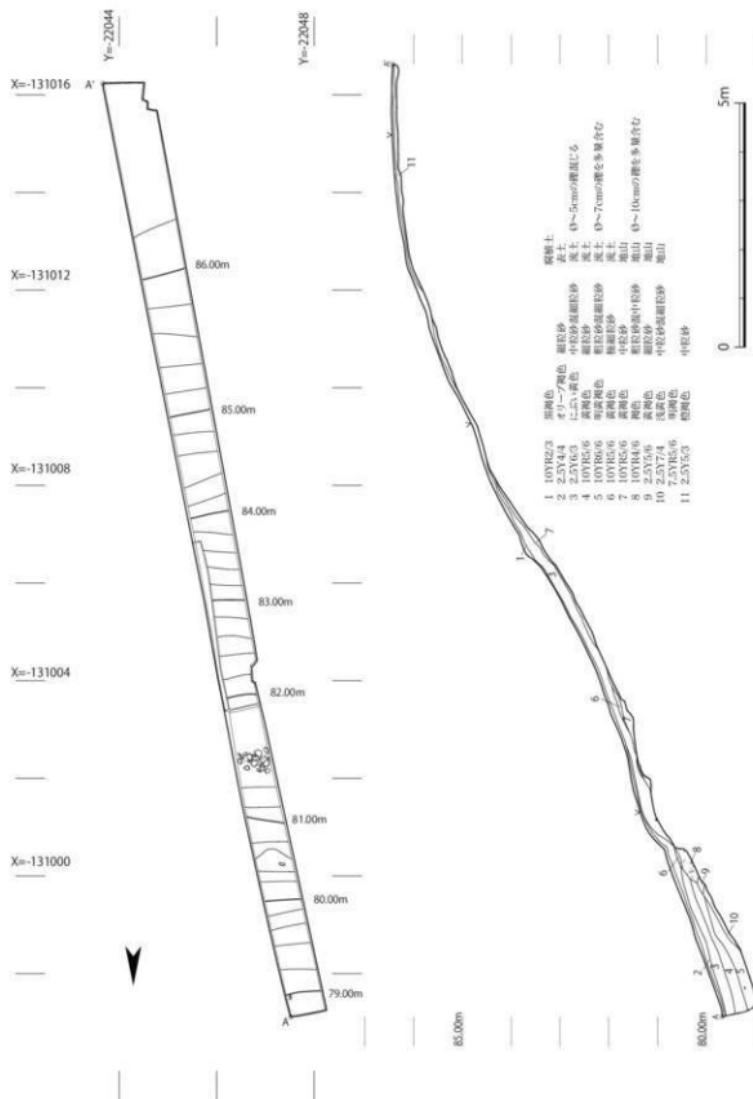
3-2トレンチは墳頂部から西側斜面に設定した、幅1m、長さ21mの調査区である。ただし調査区西端から2mの部分は、幅1.5mに設定して掘削を行った。当初調査区全体で掘削を行い、全面で墳丘面を検出する予定であったが、調査期間の都合上、墳丘の裾を確認することを優先し、調査区西側を中心に掘削を行った。

墳頂部付近では表土直下で橙褐色中粒砂（第17層）を検出した。一方、調査区西側端では転落石を含む流土（第3~12層）を検出し、その下層に極粗粒砂の地山（第13~14層）を検出した。

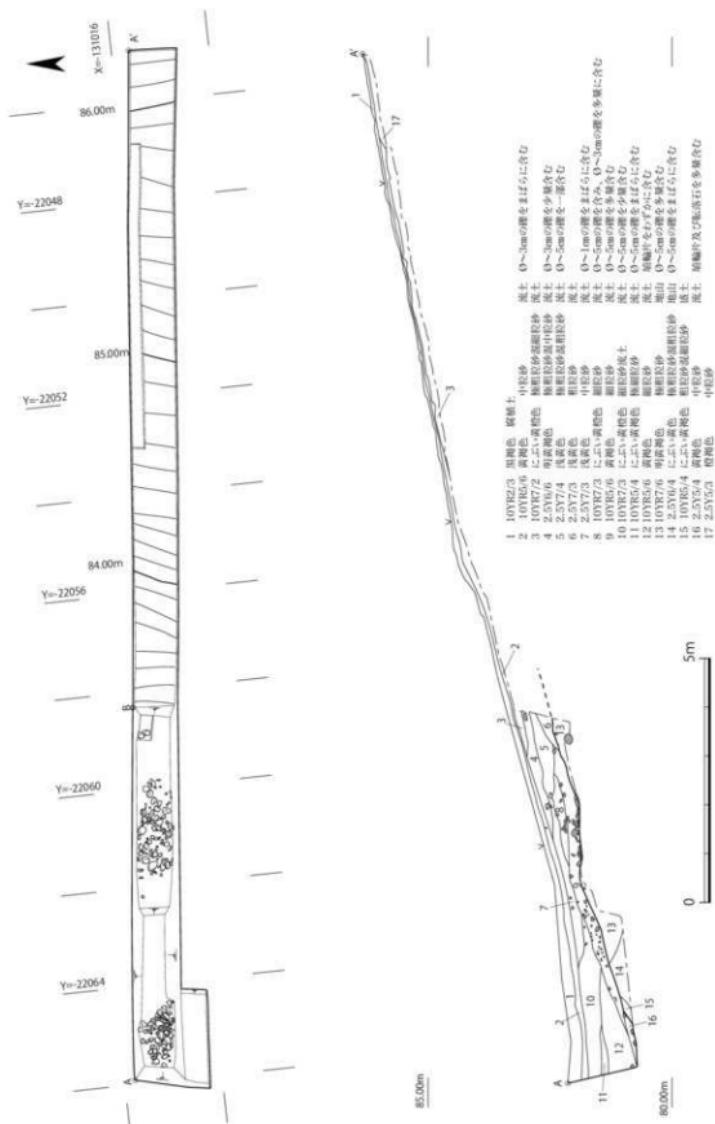
調査区西側で検出した墳丘斜面は約3.5m、墳丘傾斜角は約17度を測る。地山を削り出したのち、部分的に盛土を行い、葺石を設置している。葺石の検出レベルはもっとも低い地点で標高80.6mである。葺石は長辺15cm前後のものを用い、調査区西端から東へ約1.3mまで遺存している。そこ



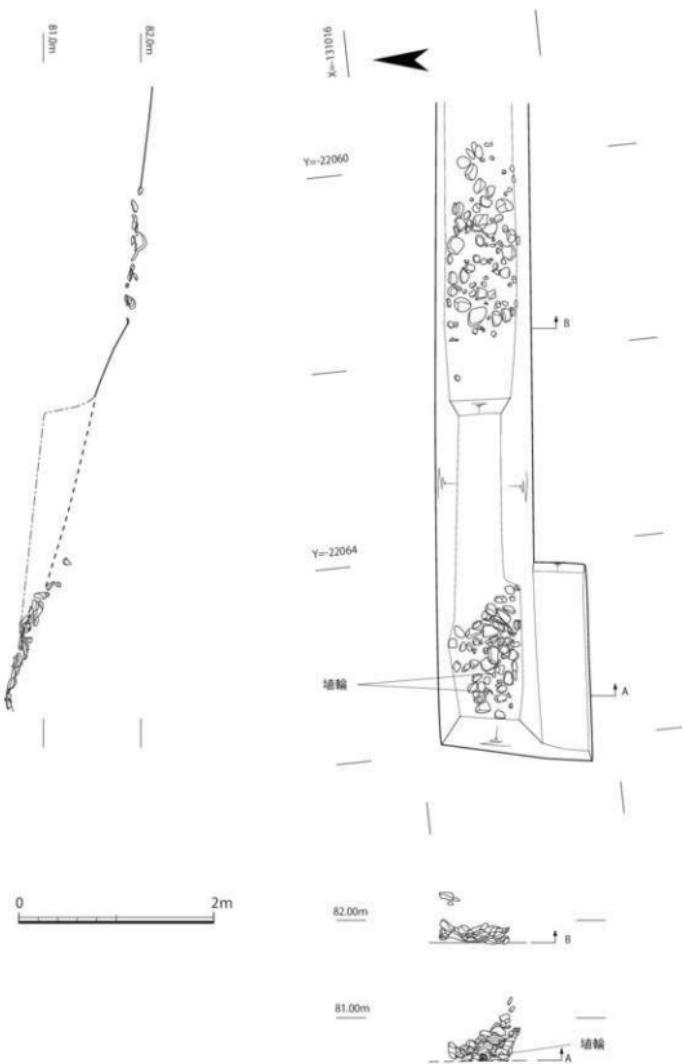
第11図 3号填調査区配置図 (1/400)



第12図 3-1 トレンチ平・断面図 (1/100)

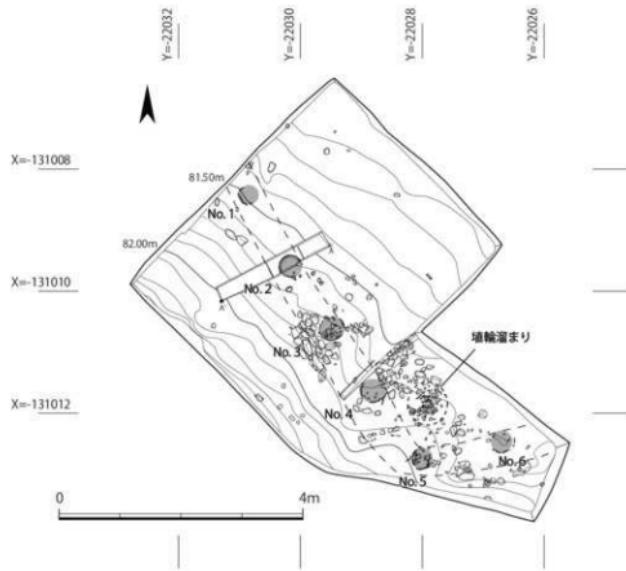


第13図 3—2 トレンチ平・断面図 (1 / 100)

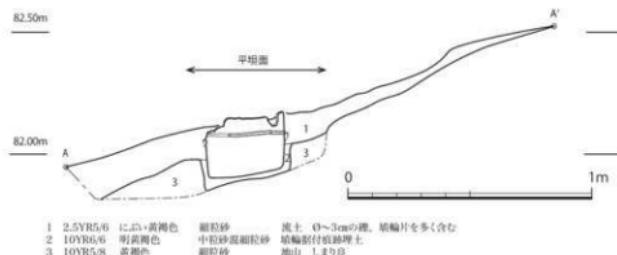


第14図 3—2 トレンチ葺石検出状況平・立面図 (1 / 50)

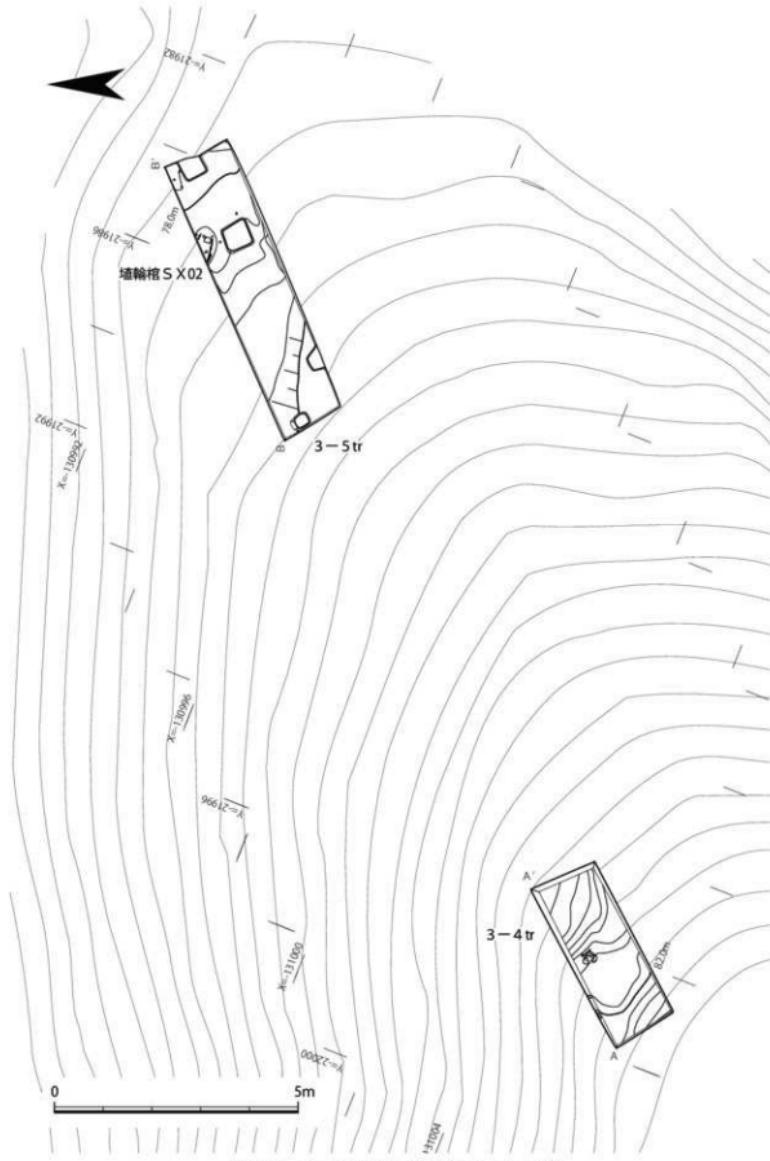
から東側は残存していないが、土層断面で細粒砂の流土（第9層）と地山の境界が明瞭に観察できる。標高約82mで検出した平坦面は、幅約1.5mを測る。3-1トレンチと同様に、地山を削り出して平坦面を形成した上に、直径約15cmの石材を置く。また平坦面は現地表面から0.6m～1m下に検出しているのに対し、墳丘裾付近は現地表面から約1.5m下で葺石・転落石を検出しており、墳丘裾部分は後世の堆積がかなり厚い。堆積土のうち約90cmが均質な土質（第10～12層）であり、大量の土砂が一度に流入したと想定される。出土遺物は埴輪および土器（第21～23層）



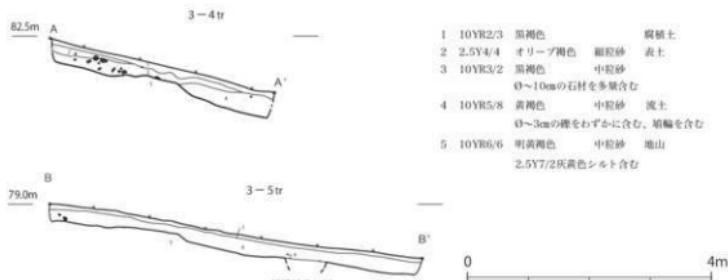
第15図 3-3トレンチ平面図 (1/80)



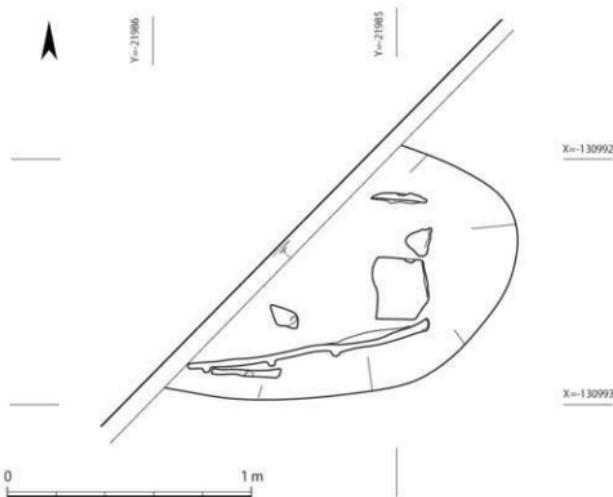
第16図 3-3トレンチ埴輪 (No. 2) 断面図 (1/20)



第17図 3-4・5トレンチ平面図 (1/100)



第18図 3—4・5トレンチ断面図 (1/80)



第19図 3—5トレンチ埴輪棺SX 02検出状況 (1/20)

図)が出土している。埴輪は第16層に特に多く含まれ、土器も16層から出土している。それに対して、第9層のように転落石を多く含む流土には埴輪片は含まれず、場所を限定して埴輪を設置していた可能性も考えられる。

④ 3—3トレンチ (第15・16図)

北側くびれ部を確認するために、幅4.5m、長さ7.5mの調査区を設け掘削を行った。表土下には直径3cmの礫や埴輪を多く含むにぶい黄褐色細粒砂(第1層)の流土が厚く堆積しており、黄褐色細粒砂の地山(第3層)に至る。本調査区からは、埴丘斜面、平坦面、基底石、葺石、埴輪列を検出した。

埴丘斜面の検出長は最大約1.2m、傾斜角は約25度である。また、平坦面の検出長は約0.6m、標

高は約82mを測る。斜面と平坦面の境には基底石が部分的に遺存しているが、斜面の葺石は原位置を保つものを検出していない。基底石は長辺約20cmの石材を用い、長軸を埴丘に沿って横向きに配置する。

平坦面からは6本分の埴輪（No.1～6）を検出した（第15図）。埴輪の直径は35～40cmであり、80cm～1mの間隔で樹立されている。埴輪列はNo.5を境に屈曲していることから、No.1～4は後円部側、No.6は前方部側に据えられた埴輪であるといえる。

埴輪の埋設状況を確認するため、埴輪（No.2）において断剣を行った（第16図）。埴輪は地山を削り出して成形した埴丘斜面に深さ約12cmの壺堀りを行い埋設される。壺堀りの大きさは直径約40cmであり、埴輪本体の直径よりわずかに大きいにとどまる。今回の調査では、断剣を行った埴輪（No.2）のみを取り上げ、その他の埴輪は真砂土で保護し、現地に保存した。また、流土中から多くの埴輪片が出土した。

⑤ 3—4トレンチ（第17・18図）

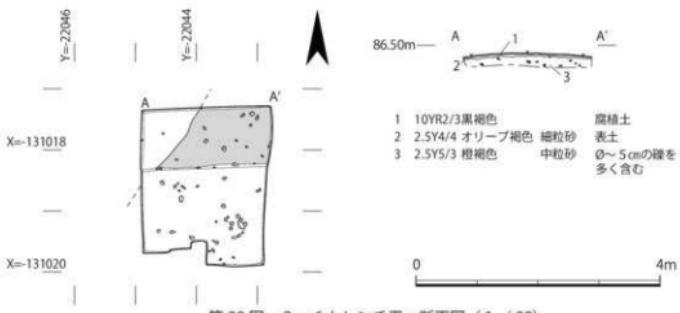
前方部北東コーナー部分の斜面から平坦面にかけて、幅1.4m、長さ3.6mの調査区を設定した。表土掘削後、直径約10cmの礫を多く含む黒褐色中粒砂の流土（第3層）を検出し、その下層に明黄褐色中粒砂の地山（第5層）を検出した。調査区南西側から中央にかけて地山を検出し、調査区南西端から約0.7mの地点で傾斜が変わる。この変換点が埴丘の斜面と平坦面の境とみられる。平坦面の標高は約81mを測り、平坦面上では長辺約15cmの石材を数個検出した。調査区北東側は遺存状態が悪く、正確な平坦面の長さは明らかではない。遺物は少ないが、表土直下で埴輪の底部片が出土している。

⑥ 3—5トレンチ（第17～19図）

前方部の裾を確認するため、幅1.4m、長さ6.1mの調査区を設定した。表土下に黄褐色中粒砂の流土（第4層）、さらに下層より明黄褐色中粒砂の地山（第5層）を検出した。調査区南西側で、地山の傾斜変換点を検出した。地山は南西から北東に向かって緩やかに傾斜し、調査区中央付近ではほぼ平坦に変わる。斜面やその周辺から葺石や埴輪列は検出していないが、地山の傾斜は南西から北東に向かって下降し、前方部北側から南東側へ緩やかに湾曲していくこと、そこから北東側は傾斜がなくなりほぼ平坦になることから、この傾斜は埴丘裾部分を反映すると判断した。

また調査区北東端から1.4mの地点に、地山を掘り込んで埋設した円筒埴輪の一部を検出した（第19図）。検出地点の標高は約78mである。円筒埴輪は横倒しの状態で、底部から3段目まで検出した。3段目以上は調査区外へ伸びているため、その全容は確認できない。埴輪は底部高18cm、2段目の突堤間隔は12cmで、3段目に円形透孔を穿つ。底部径は計測できないが、底部の厚さは約2cmを測る。内面にヨコハケを施し、黒斑がみられる。他の調査区で出土した埴輪と比較すると焼成は良好である。検出場所が埴丘の外側であることから、埴輪棺である可能性が考えられる。また調査区内からの遺物として、表土中より埴輪の破片を多数出土している。なお、埴輪棺は上面検出後、真砂土で覆い、現地に保存した。

⑦ 3—6トレンチ（第20図）



第20図 3-6トレンチ平・断面図 (1/80)

3-6トレンチは埴頂部に設定した、幅2.1m、長さ2.6mの調査区である。表土直下で直径約5cmの礫を含むオリーブ褐色細粒砂(第2層)を検出した。第2層の中には埴輪片が含まれる。堆積状況を確認するため、調査区北端から幅約1mに限って第2層面から約15cm掘削したところ、橙褐色中粒砂(第3層)を検出した。第3層中にも礫が含まれるが、第2層に比べその量は少ない。第3層中にも埴輪片が確認できたので、そこからさらに15cm下へ掘削を進めると、調査区東側でしまりの弱いにぶい黄色土を検出した。検出した標高は約86mである。3-6トレンチの周辺に設定した3-1トレンチ、3-2トレンチからは、3-6トレンチの調査区西側と同様の橙褐色中粒砂を検出しているため、本調査区東側で検出したにぶい黄色土が埋葬施設と関連する遺構である可能性が考えられる。出土遺物は各層から少量の埴輪の破片が出土している。

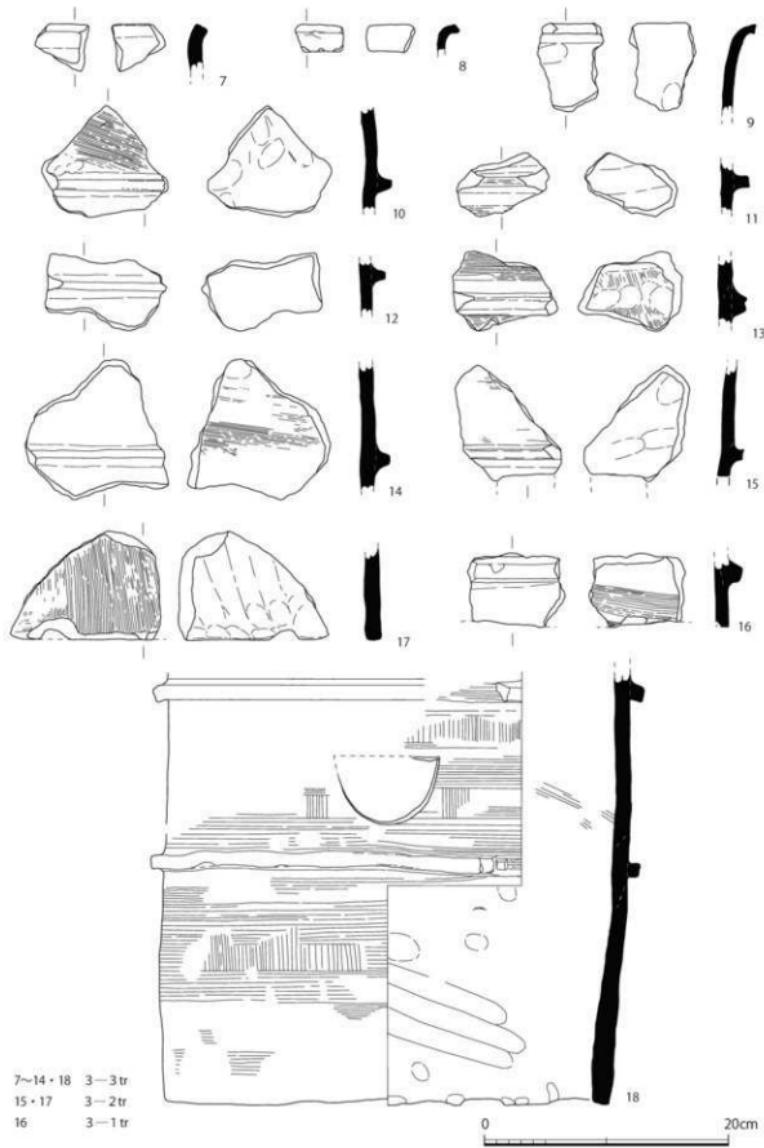
(上野)

⑧ 出土遺物

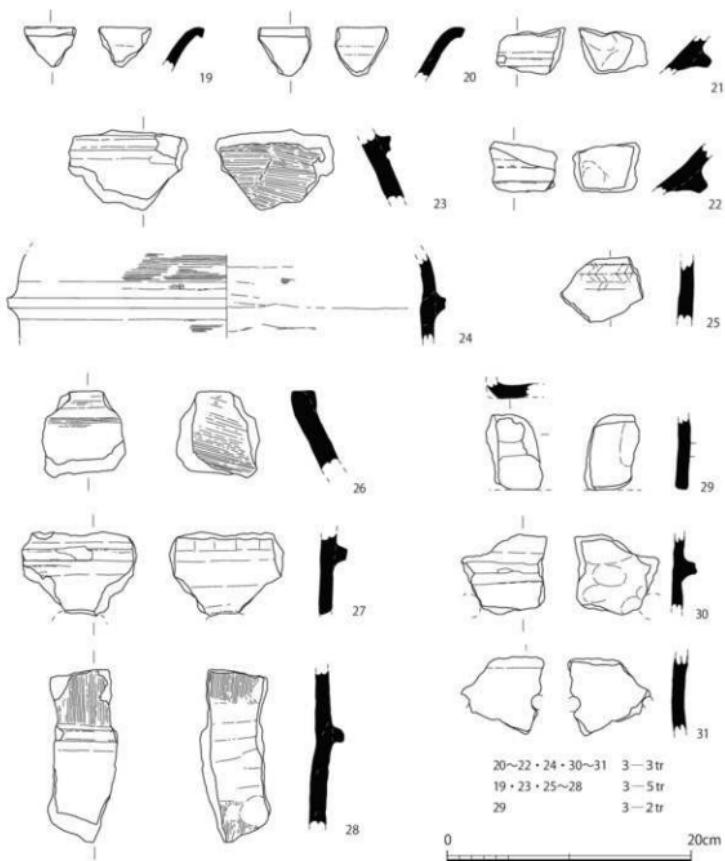
埴輪(第21~22図) 天理山3号墳から出土した遺物は埴輪、土師器、土製模造品があり、コンテナ3箱分である。すべての調査区から遺物が確認できたが、3-3トレンチからの出土がもっとも多い。出土遺物は図化できるものをピックアップして報告する。原位置を留めているものは18(No.2)のみであり、他は墳丘から転落したもの、および埴輪棺S X 02の一部とみられる資料である。

第21図は3-1~3トレンチから出土した普通円筒埴輪である。7~9は3-3トレンチから出土した普通円筒埴輪の口縁部である。7~9ともに口縁端部を外反し、8·9は外反が強い。7は外面にヨコハケを施したち端部を屈曲させてナデを行う。器壁は約1.1cmである。8は内外面ともにナデ調整を施している。器壁が約0.6cmとかなり薄い。9も同様に器壁が薄く、中でも胴部から口縁端部にかけての屈曲する部分に強いナデ調整を施す。外面にヨコナデが観察できる。

10~16は普通円筒埴輪の胴部である。10~14は3-3トレンチ、15は3-2トレンチ、16は3-1トレンチから出土した。10は外面調整にナナメハケを施す。ハケの単位は他の個体と比べてやや細かい。内面はユビオサエおよびナデを施す。突帯は端面が丸く、突出度が高い。器壁は上部にかけて内傾する。11の外面調整はヨコハケ、内面調整ヨコナデを施す。突帯は高く突出し、端面にはヨコハケが確認できる。12は内外面ともに摩耗が激しく、調整は不明である。突帯は他の個体より端面の幅が狭い。13は外面に静止痕のないヨコハケを施す。内面にはタテハケのちナデ調整



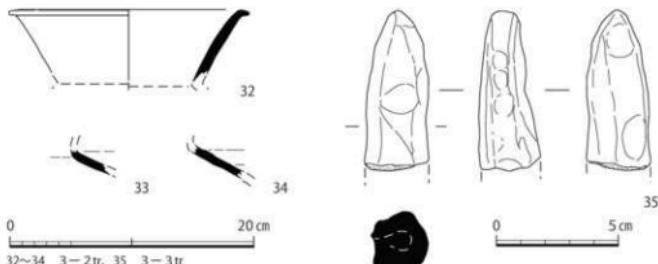
第21図 3号填出土埴輪 (1/4)



第22図 3号墳出土埴輪（1/4）

を施すが、突帯の裏側には突帯貼り付けた際のユビオサエが確認できる。突帯は端面を強くなれ、M字状に突出する。また突帯の上側に対して幅広のナデ調整を行う。14の外面調整は摩滅が激しいが、内面調整はナナメハケを施す。突帯形状は10にやや似ているが、突帯下端のナデがやや甘い。

15・16は下端部に方形または半円形透孔を有する破片である。15は外面調整ヨコハケ、内面調整にユビオサエが確認できる。突帯形状は台形であるが、上下に強いナデを施すことで高く突出させている。16は摩滅により外面調整が不明だが、内面には細かいナナメハケを施す。突帯は他の個体に比べ端面の幅が広い。17は円筒埴輪の底部である。3—2トレンチから出土した。外面にはタテハケを施し、内面にタテナデ、下端にはユビオサエが観察できる。最下端の厚さは約1.2cmであり、



第23図 3号墳出土土師器・土製模造品(1/4、1/2)

底部としては同時期の埴輪と比較してやや薄手である。外面には黒斑を有する。

18は3-3トレンチで検出した埴輪列のうち、後円部側から検出した円筒埴輪(第16図)である。底部高19.3cm、底部径37.6cm、突帯間隔12.5cmで、2段目に半円透孔を穿つ。突帯形状は台形であるが、2条目突帯は端面がやや下方へ傾く。外面は1次調整タテハケを施したのち、2次調整ヨコハケを施す。静止痕は確認できない。内面調整にはナナメハケおよびナデ、ユビオサエが確認できる。突帯が剥離している部分にもヨコハケが認められるため、ヨコハケ調整を行ったのち突帯を貼り付けたことが想定される。また突帯が剥離している部分には方形刺突が確認され、突帯設定技法(辻川2003)が確認できる。黒斑をもち、野焼き焼成である。

第22図の20~22・24は3-3トレンチ、19・23は3-5トレンチから出土した朝顔形円筒埴輪である。19・20は口縁端部、21・22は2次口縁部、23は頸部突帯から肩部、24は胸部である。

19~24は外面にナデ調整を施す。19・20は口縁端部を外反させ、内面にナデ調整を施す。19の外面には赤彩の塗布がされている。21・22は内面にユビオサエが認められる。中位突帯の形状は台形であり、22は21に比べ突帯下部が厚い。23は内面に静止痕をもつヨコハケを施す。突帯は端面中央が高く突出し、各面には強いヨコナデを施す。24は直径36cmに復元できる。内外面ともに粘土紐の接合痕が明瞭に残る。突帯の形状は台形である。26~28は3-5トレンチの埴輪棺S X 02の周辺で出土したもので、埴輪棺の破片とみられる。26は上端部を約0.5cm粘土を貼り付け肥厚させており、その部分も含めてヨコハケが施される。外面には部分的に赤彩がみられ、内面はナナメハケを施す。棺蓋の上端部である可能性が考えられる。27の外面は摩耗しており調整は不明である。内面はヨコナデおよびタテナデを強く施す。下端には円形透孔の一部が確認でき、外面に黒斑がみられる。突帯は断面台形であり、突出度が高い。28は内外面ともにタテハケ調整を施す。内面にはオサエおよび突帯の裏側に強いヨコナデがみられる。器壁は粘土紐を積み上げ成形され、突帯は摩耗しており丸みを帯びてやや下方に傾く。27・28は棺身の破片と考えられる。

29は3-2トレンチから出土した形象埴輪である。内外面ともにナデを施し、内面にはユビオサエもみられる。外面には下端部から2.7~3.8cmの位置に剥離痕がみられる。また、個体の左側にも縦に長く剥離面がみられ、コーナー的一部分と想定できる。器壁は約1cmであり、家形埴輪の壁部にしてはやや薄手だが、家形埴輪または圓形埴輪の可能性が考えられる。25・31は不明埴輪である。

25は3-5トレンチから出土した。外面に綾杉文が確認できる。厚さは最大1.2cmであり、天地は不明である。

30・31は胴部に小孔を持つもので、器種は不明である。いずれも3-3トレンチから出土した。30は内外面ともユビナデ調整で、径約1cmの孔の一部が確認できる。31は外面にヨコナデがみられるが、内面は摩耗しているため調整は不明である。焼成前に穿孔された小円孔が2箇所に認められる。円孔は直径約1.1cmと復元でき、円孔間の距離は約5cmである。外面には赤彩が僅かにみられる。

天理山古墳群の中では3号墳が遺物の出土量がもっと多く、天理山古墳群の位置付けを行う上で重要な資料である。底部高や突帯間隔が明らかになったのは1個体のみであるが、その特徴は破片資料とも大きく相違はない。これらは黒斑をもち、外面調整タテハケの後ヨコハケを施すが、静止痕をもつ個体は認められない。また突帯は断面台形または一部M字状であり、突帯設定には方形刺突による突帯設定技法が用いられていることが確認できた。また透孔には円形、半円形の少なくとも2種類が存在する。これらのことから、埴輪の時期として川西編年Ⅱ期の中でも新相に位置付けられる（川西1978）。

（上野）

土師器（第23図）32～34は3-2トレンチから出土した。32は土師器片である。焼成は軟質で、胎土には砂粒を多く含む。口縁端部は薄く屈折し、ユビナデにより丸く仕上げる。下半は欠損するが、剥離したたような痕跡があり、屈曲部とみられる。したがって、直口壺あるいは器台の口縁部が復元の候補となろう。器台とすると、いわゆる山陰系の開地谷形器台で、布留3～4式、古墳時代前期後葉の遺物である。33と34は3トレンチ流土中から出土した土師器壺頸部片である。いずれも胎土には白色粒を多く含む。

土製模造品（第23図）35は土製模造品とみられる。3-3トレンチから出土した。焼成は良好で、胎土には砂粒やシャモットを含む。先細りの円錐形を呈し、下半は欠損する。断面には粘土巻き痕が認められ、粘土板をユビナデにより成形したものと考えられる。側面にはナデの痕跡を特に顕著に残している。アケビあるいはマメの模造品であろうか。

（桐井）

⑨ 小結

調査の結果、3号墳は前方後円墳であることが判明した。その規模は全長81m、後円部径42m、最大高7.6mに復元することができよう。墳丘の大部分は地山を削り出して成形を行なうが、埴輪列や葺石を設置する部分はわずかに盛土を行なっている。墳丘の1段目斜面には基底石や葺石を有することに加え、平坦面にも石を配置していることが明らかになった。今回の調査では2段目斜面には葺石が認められなかったが、流土中にも転落石を検出していないことから、1段目と2段目では外表施設のあり方が異なっていた可能性も考えられる。平坦面には埴輪列を配するが、埴輪同士の設置間隔は比較的広く樹立する特徴がみられる。墳頂においても葺石を検出しており、墓壙が遺存している可能性も考えられる。出土遺物から推測できる古墳の築造時期は古墳時代前期後半といえる。（上野）

(3) 4号墳の調査

① 調査の概要（第24図）

4号墳は、田辺郷土史会による踏査の際は知られていなかったが、昭和44（1969）年の遺跡地図では径15m、高さ2mの円墳とされている。事前の測量の結果、東西に主軸を持つ前方後方墳である可能性が指摘された。古墳の規模と墳形を確認するため、前方部、後方部、くびれ部、墳頂と想定されてる位置にそれぞれトレーニングを設定し、調査を行った。

② 4-1トレーニング（第25図）

4-1トレーニングは、南くびれ部とみられる位置に設定した、幅2m、長さ8.5mの調査区である。地山掘出面まで掘削を行ったが、くびれの痕跡や地山の傾斜変換点は認められなかった。また、段築の痕跡も確認できなかった。出土遺物はない。

③ 4-2トレーニング（第26図）

4-2トレーニングは、前方部端を確認するために設定した、幅0.9m、長さ5.3mの調査区である。表土、腐植土が厚く堆積しており、西側では約0.4m、東側では約0.7mの厚さがある。調査期間の都合上、表土掘削後に全面の掘り下げを行わずに北半分で断削を行い、墳丘の確認を行った。その結果、トレーニング中央付近で墳丘となる可能性がある地山の傾斜変換点を検出した。盛土や葺石は認められなかったため、地山を削り出すことによって墳丘を構築したと考えられる。

④ 4-3トレーニング（第27図）

4-3トレーニングは、後方部端を確認するために設定した、幅0.9m、長さ8.2mの調査区である。表土直下には表土と腐植土が0.1～0.2m堆積しており、その下層では地山を確認した。段築や葺石は確認できていない。転落石も皆無で、もともと葺石は存在しなかったと考える。また、調査区西端で地山の落ちを確認した。人為的な削り出しかは不明だが、墳丘裾部の可能性がある。

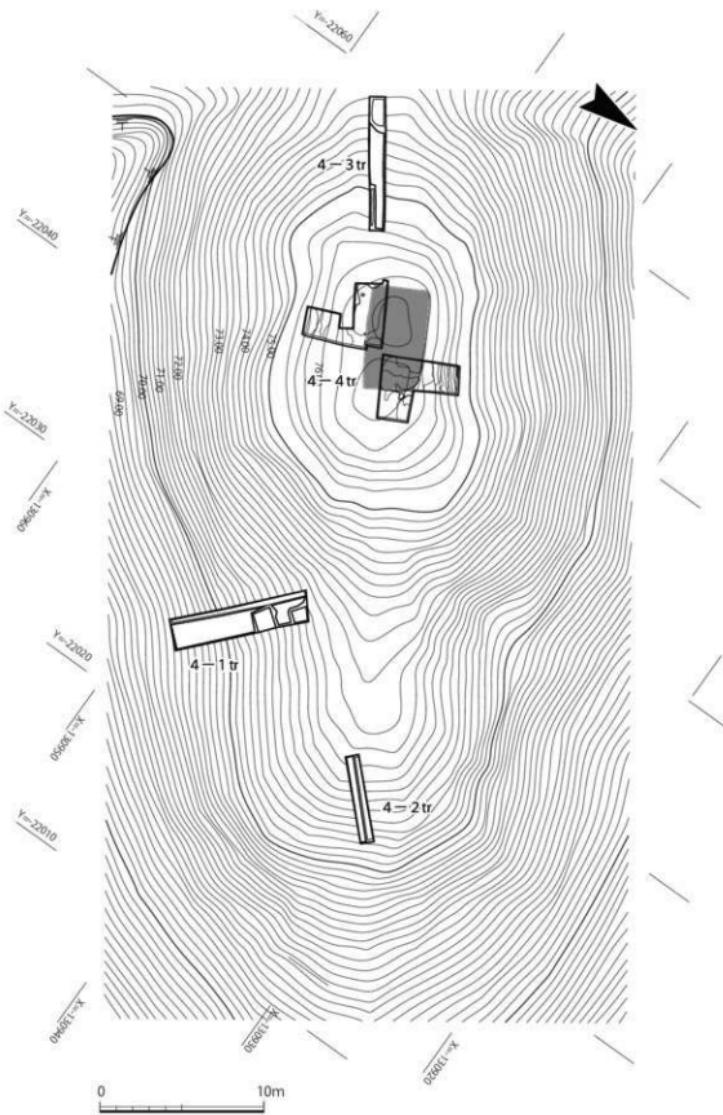
⑤ 4-4トレーニング（第28図）

4-4トレーニングは、墳頂部に設定した調査区である。埋葬施設の有無と規模を確認するため、「L」字状の調査区を2ヶ所に設定した。

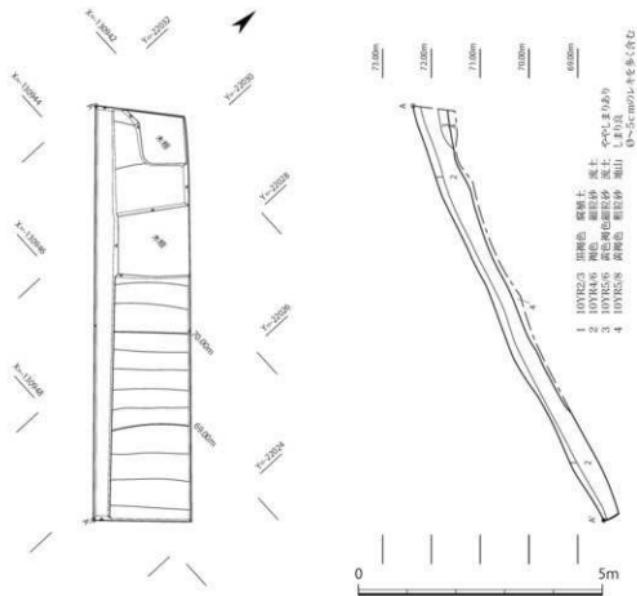
墳頂部では表土及び腐植土を除去した段階で、一部では墓壙とみられる土色変化を確認した。そのため、全面的に精査を行い、墓壙の検出を目指したが、一部は樹木による土層の搅乱が著しく、場所によって検出レベルが異なる。墓壙S X 04は、長辺6.4m、短辺3.8mを測る隅丸方形である。検出した段階で掘り下げを停止しているため、深さや棺は不明だが、大きな石材が認められないことから、粘土塚か木棺直葬とみられる。

墓壙上面では、拳大の礫が下層に落ち込んでいる様子を確認した。したがって、墓壙埋土上面には本来礫が散布されており、木棺の腐食により中央部に向けて礫が落ち込んだものと考えられる。西端では標高76mで水銀朱の痕跡が検出された。そのため、周囲で木棺痕跡を検出するために入念に精査を行ったが、検出することができなかった。したがって、棺内ではなく、棺上面よりも上層で散布された朱を検出したものと考えておきたい。

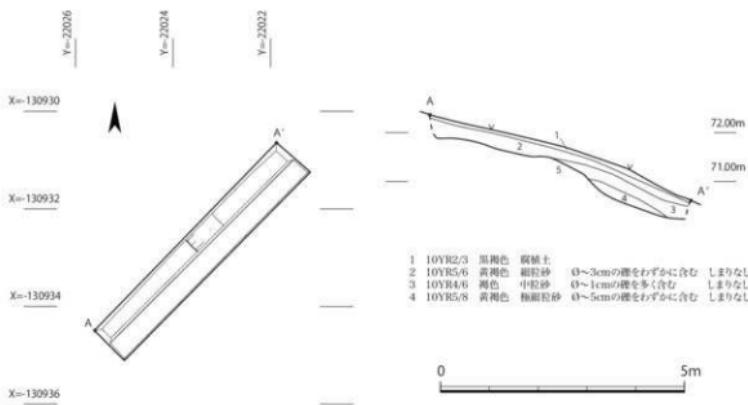
また、朱の周辺では人頭大の粘土ブロックも認められ、粘土を含む土で棺は埋め戻されたと考えられ



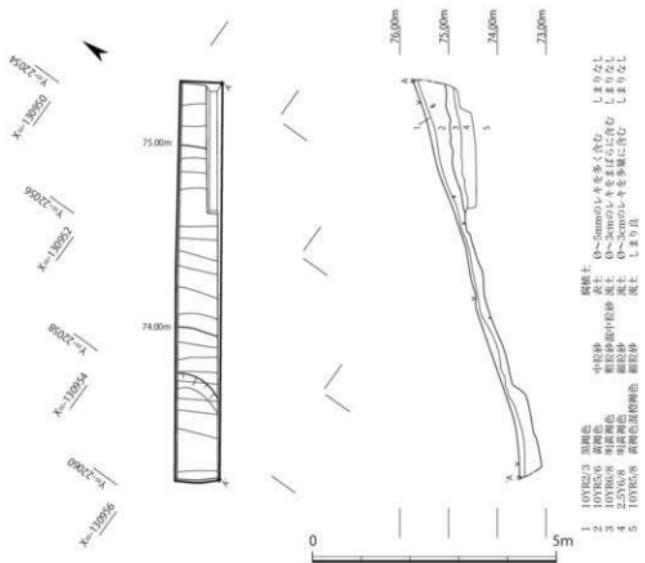
第24図 4号填調査区配置図 (1 / 300)



第25図 4-1 トレンチ平・断面図 (1/100)



第26図 4-2 トレンチ平・断面図 (1/100)



第27図 4-3トレンチ平・断面図 (1/100)

る。このような事例は城陽市西山1号墳でも報告されている(小泉ほか1999)。墓壙検出中に、土師器の小片が2片出土している。本来墓壙上に供献された可能性がある。

墓壙の周囲では、径20~40cm程度の円形の柱穴を2基検出した。しかし、墓壙を取り囲むよう検出されたわけではなく、南辺と東辺で1基ずつを検出したのみである。西辺は掘削を行っていないため不明だが、北辺では同じような遺構は認められなかった。

⑥ 出土遺物

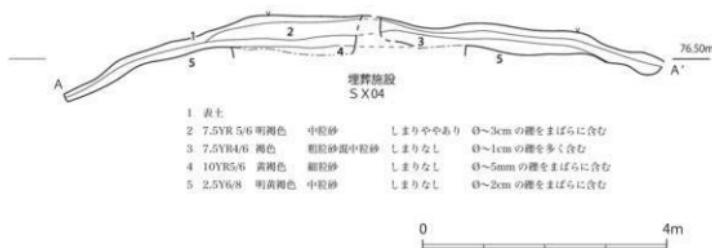
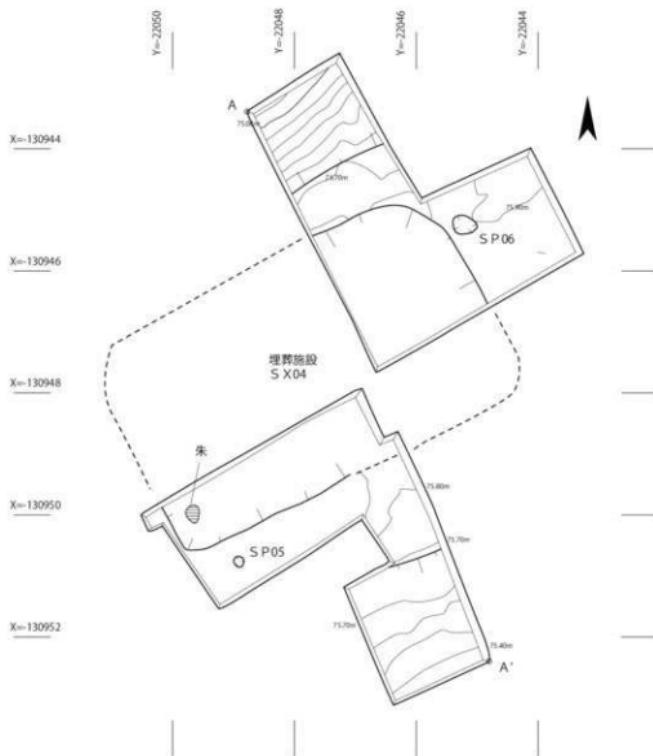
4-4トレンチ掘削中に土師器の小片が2点出土している。図版第14(3)は屈曲部の破片で、壺か小形器台とみられる。小形器台とすると、布留2式、古墳時代前期中葉が下限となる。

⑦ 小結

調査の結果、4号墳は墳長約42mの前方後方墳であることが明らかとなった。後方部は約23m×約17mでいびつな長方形で、短い前方部が取り付く形になると考えられる。墳丘は地山削り出しで、外表施設や段築は認められなかった。

埋葬施設は上面が根摺乱で削平されていたが、6.4m×3.8mの墓壙を確認した。周囲で石材は確認されていないことから、木棺直葬墓か粘土槨と考えられる。

(桐井)



第 28 図 4—4 トレンチ平・断面図 (1 / 80)

(4) 周辺の調査

① 調査の概要

先述のように、1、3、4号墳は事前の測量によって前方後円墳である可能性が高まったため、それぞれ調査を行ったが、その他、古墳の周辺でも尾根上の平坦面や古墳状の高まりなどが数ヶ所で認められた。そのような地点を中心に、古墳や遺構、遺物の広がりを確認するために、4ヶ所にトレーニングを設定して調査を行った。合計調査面積は約75m²である。

② 天理山2号墳付近の調査

(2-1 トレーニング) (第29・30図)

2号墳は、昭和13年(1938年)の田辺郷土史会の踏査によって古墳とされていました。それによると、「3型式の須恵器と円筒埴輪の一部とみられる破片が見つかった」とされており、古墳時代後期の円墳と考えられてきました。事前の測量では、古墳の形状は明らかではなかったが、尾根上に縦長の調査区(2-1 トレーニング)を設定し、調査を行った。

調査区は、長辺9.9m、短辺2mの長方形である。表土直下で地山とみられる砂質土を検出した。精査を繰り返したが、墳丘の痕跡や遺構を検出することはできなかった。また、遺物も出土していない。

田辺郷土史会の報告によると、「黙々寺南方山上」の「祝園部落へ入る電話線の電柱のある地点」で遺物が見つかったとされている。今回調査を行った地点のすぐ西側には高さ2m程の高まりがあり、その上には電柱が立てられているが、フェンスで囲まれており、調査を行うことができない。この高まりが、当時遺物が採取された2号墳である可能性もあるが、少なくとも前方後円墳ではないことは明らかとなつた。

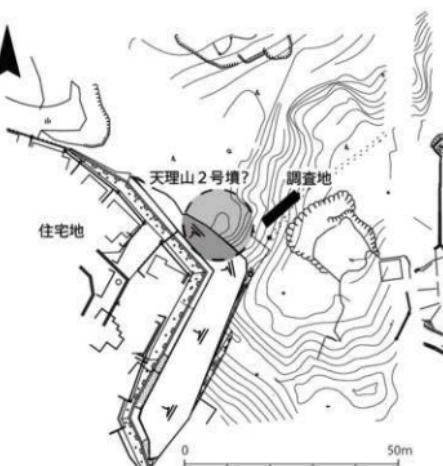
(桐井)

③ 周辺の調査

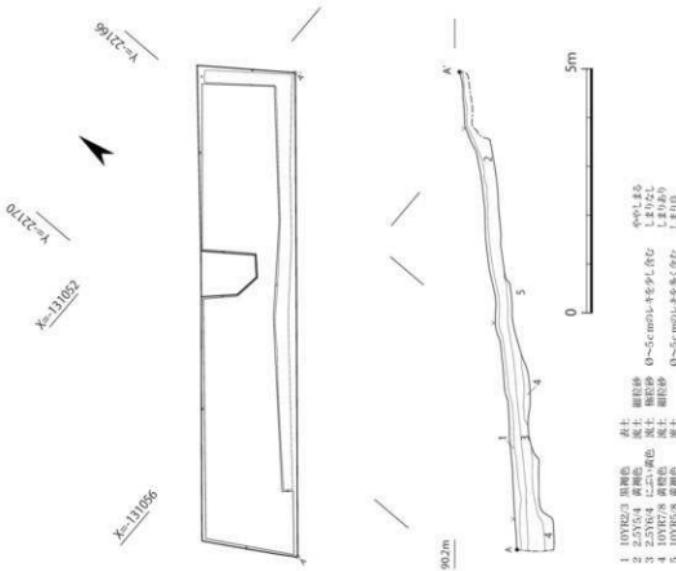
周知の埋蔵文化財包蔵地である天理山古墳群の他に、周辺の遺跡の有無を確認するため、3箇所に調査区を設定した。いずれも現況測量図をもとに、何らかの遺跡が存在する可能性が考えられる地点である。

2-2 トレーニング (第31図)

調査区は最大幅1.8m、長さ6.8mであり、2-1 トレーニングから北東側へ約75mの地点に設定した。表土直下にて調査区全面で明黄褐色中粒砂(第2層)を検出した。調査区北西側ではその下層に地山(第4層)を検出した。南東側では中粒砂土の下層ににぶい黄色粗粒砂(第3層)を検出したため、調査



第29図 2号墳周辺の地形と調査地 (1/1,500)



第30図 2-1 トレンチ平・断面図 (1/100)

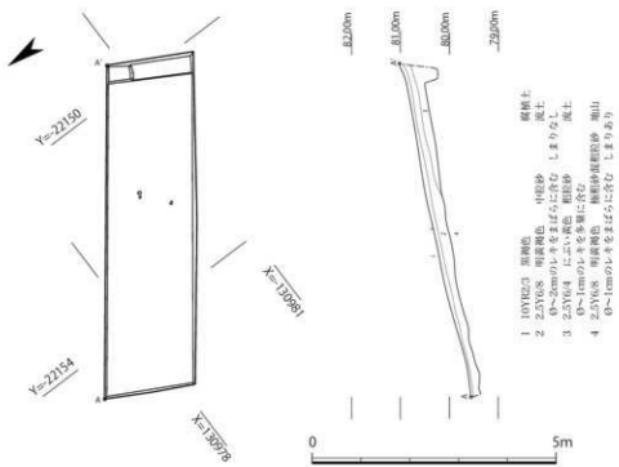
区南端に幅50cmの断割を設けた。第3層の粗粒砂土が標高約80.2mまで続き、地山の検出には至っていない。堆積土・地山とともに2cm程度の礫を含むが、第2層に比べ第3層がより多く礫を含む。精査を行ったが遺構は確認できず、遺物は出土していない。

2-3 トレンチ (第32図)

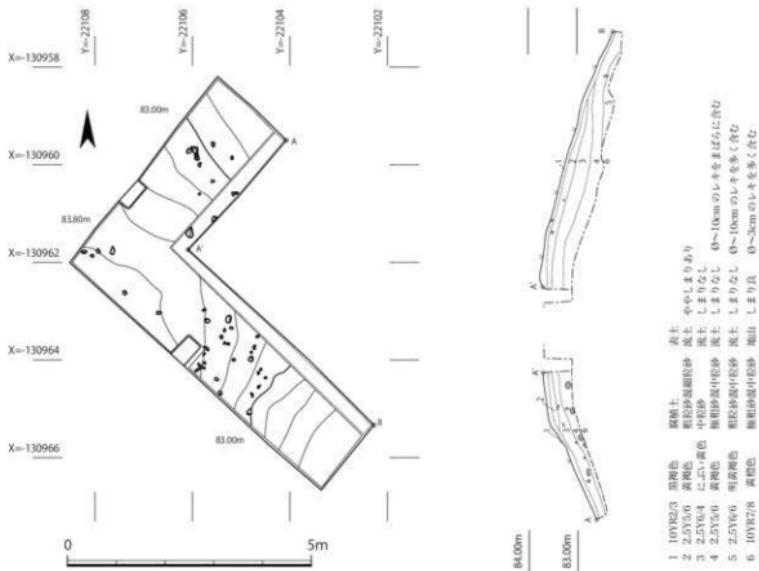
事前の地形測量図から古墳である可能性が考えられたので、1号墳から北東へ約35mの平坦部分から斜面部にかけて調査を行った。調査区は最大幅1.9mであり、長さは北東へ7m、南東へ4.9mのL字状に設定した。表土中に直径約10cmの礫をやや多く含み、その下層からしよりの強い粗粒砂混じりの黄褐色細粒砂土(第2層)を検出した。第2層の上面で約5cmの礫がやや多く検出されたので、堆積状況や地山の状態を確認するためサブトレンチを設定して掘削を進めた。第3~5層は礫が多くしよりの弱い中粒砂土を検出した。礫の混入は南東側調査区に比べ北東調査区にやや多くみられる。地山はもっとも高い地点で、標高83.1mの地点で検出した(第6層)。地山は調査区内では標高約82.1mの地点までなだらかに下降し、その比高差は約1mを測る。遺物は出土していない。

2-4 トレンチ (第33図)

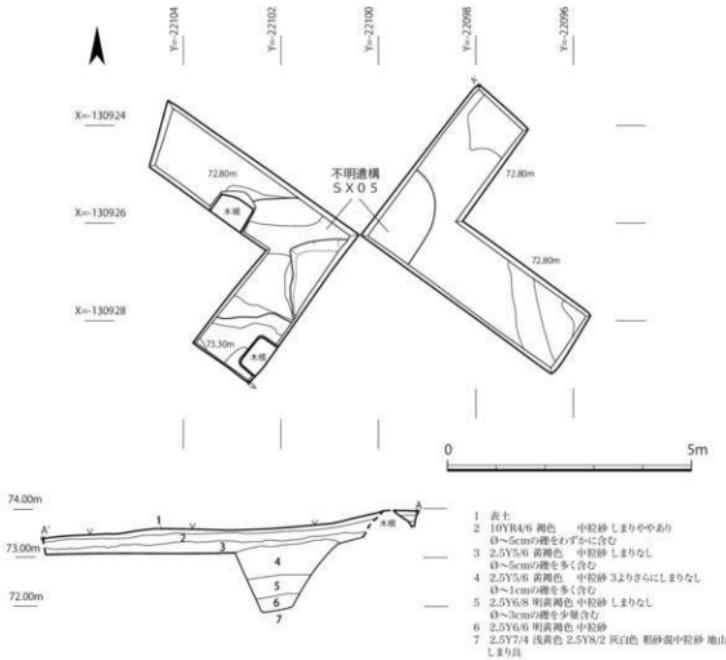
2-3 トレンチから北へ約30mの地点に地形の張り出しが見られ、墳墓または寺院関係の遺構が存在する可能性を想定してL字状の調査区を2箇所設定した。幅1.5m、長辺約5m、短辺約4mのL字状に設定し、同規模の調査区を反転して西側にも設定し掘削を進めた。表土掘削後、調査区全体



第31図 2-2 トレンチ平・断面図 (1/150)



第32図 2-3 トレンチ平・断面図 (1/100)



第33図 2-4トレーンチ平・断面図 (1/100)

に褐色中粒砂（第2層）、黄褐色中粒砂（第3層）を検出した。第3層は直径約5cmの礫を多く含む。2つのL字の調査区が接している付近で、長辺約6.3m、短辺約3.7mの不明遺構(S X 05)を検出した。また、南東調査区の南端では第3層の上面で、灰白色中粒砂の地山を検出した。標高は約73.2mを測る。地山は北側になだらかに下り、第3層の下へ潜り込む。

不明遺構S X 05の性格を明らかにするため、南東側の調査区で検出している不明遺構の4分の1に対して断削を設定し掘削を行った。断削は深さ2m、最大幅0.8mである。断削内は地山を含め4層確認でき、そのうち第5層・第6層は直径1~3cmの礫を含む。第3層上面で検出していた地山は北へ下降し、その傾斜角は約60度を測る。地山は標高約71.8mでほぼ水平になる。その標高差は約1.4mを測る。出土遺物はなく、遺構も検出されなかったため、S X 05の性格は明らかでないが、土地を平坦に造成するために土入れをしていた可能性がある。
(上野)

4 理化学分析

(1) はじめに

天理山4号墳より検出された赤色顔料について、非破壊で蛍光X線分析を行い、その成分を明らかにする。

(2) 方法

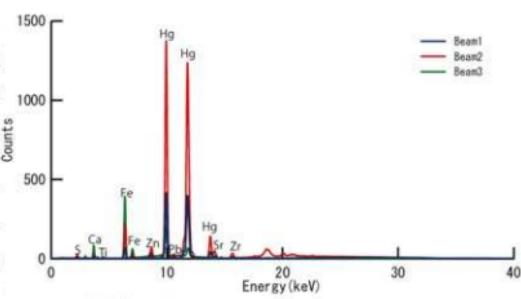
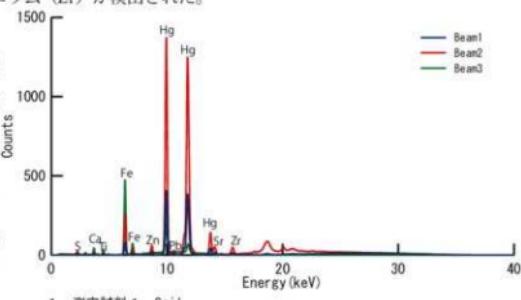
エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premium を使用した。測定条件は励起用X線ターゲットがRh、管電圧および管電流はSoilモードでビーム1が40keVおよび60 μA、ビーム2が40keVおよび40 μA、ビーム3が15keVおよび25 μA（軽元素測定時は15keV）である。装置の測定部径は9mm、計測時間は90秒で、大気雰囲気下で測定した。原子番号12番のMg（マグネシウム）以上の元素の検出が可能である。なお、測定箇所は2箇所である。

(3) 結果

水銀(Hg)のビークとともに鉄(Fe)、硫黄(S)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、亜鉛(Zn)、鉛(Pb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)が検出された。

(4) 考察

蛍光X線分析の結果、水銀(Hg)が強く検出され、また硫黄(S)も併われていることから水銀朱であることがわかる。なお、他の鉄(Fe)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、亜鉛(Zn)、鉛(Pb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)は堆積土が少なからず混ざつたため検出されたものと考えられる。水銀朱は鉱山より採掘される鉱物である辰砂（硫化水銀：HgS）を細かく磨りつぶして用いられる赤色顔料である。紀元前より使用されてきた顔料で、縄文時代後期から弥生時代中期には徳島県の加茂宮ノ前遺跡などにおいて



第34図 測定資料1(上) 測定資料2(下)



写真① 試料 赤色顔料



写真② 試料 実体顕微鏡写真



写真③ 測定試料 1



写真④ 測定試料 2

第35図 赤色顔料試料

辰砂原石から水銀朱の生産を行っていたことなどが判明している。

水銀朱の产地推定は南剛志氏により主に硫黄同位体分析で行われており、分析対象地域は北部九州地方、山陰地方、近畿地方、北陸地方である。これにより弥生時代後期には中国産の朱が王墓に利用され、弥生時代後期末には西日本各地で中国産の水銀朱へと転換し、古墳時代前期になると日本産の朱に画一化される利用状況が解明されている。また日本の水銀朱の主な産地としては三重県の丹生鉱山、徳島県の水井鉱山、奈良県の大和水銀鉱山が挙げられており、古墳時代の近畿地方を見ると3世紀中葉から5世紀後半の奈良県ではいずれの鉱山からも水銀朱が、4世紀半ばから5世紀中葉の大阪府では丹生鉱山産の水銀朱が、5世紀初頭から中葉の兵庫県では水井鉱山産か大和水銀鉱山産の水銀朱がもたらされたと推測されている。京都府では丹後地方で分析が行われており、弥生時代後期末の赤坂今井墳墓では丹生鉱山産、古墳時代前期の大田南5号墳では水井鉱山産か大和水銀鉱山産の水銀朱が利用されているが、弥生時代後期後葉の大風呂南1号墓では中国陝西省産の水銀朱が利用されていると推測されている。天理山古墳群の水銀朱の流通経路は丹後地方とは異なる可能性が高いが、他の近畿地方の例を見ると丹生鉱山、水井鉱山、大和水銀鉱山のいずれの鉱山からも水銀朱がもたらされた可能性がある。

(金原)

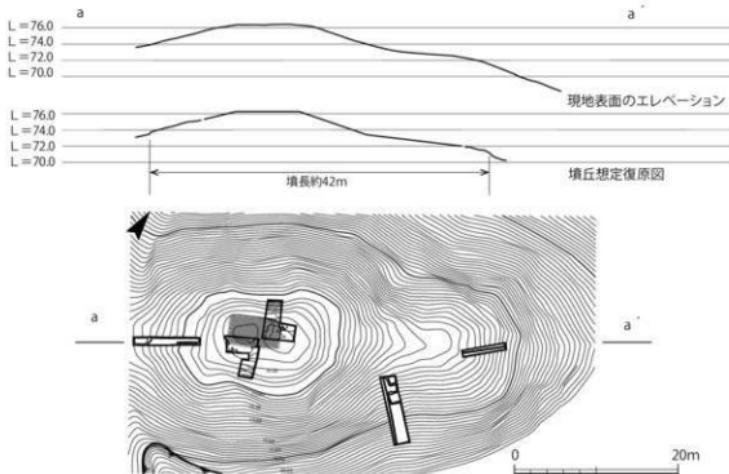
5 考古学的検討

(1) 墳丘構造の復原

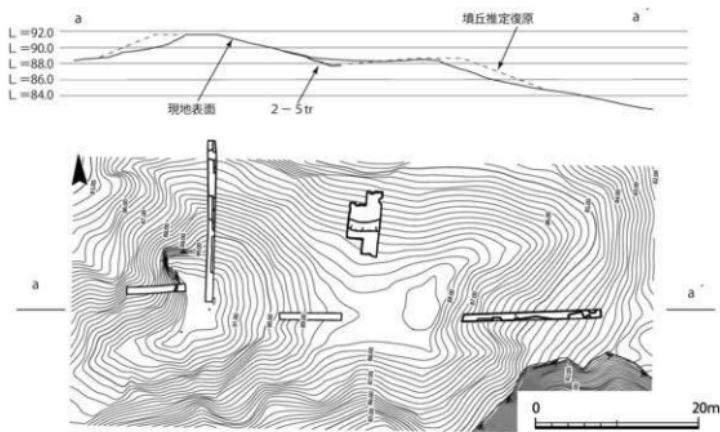
4号墳 天理山4号墳は、3基の中では最も北の尾根上に位置する。段築、葺石、埴輪等の外表施設を確認することはできなかったが、墳丘上で埋葬施設SX04を検出した。墳丘は地山を削りだすことによって成形している。前方部、後方部の調査区で検出した地山の傾斜変換点を古墳築造に伴う人為的な痕跡とみなすと、全長約42mと推定される。後方部は約23m×約17mの長方形とみられ、東側に18mの短い前方部が取り付く構造と考えておきたい。

1号墳 1号墳は、3基の中で最も高所に位置する。段築、葺石は確認することができなかったが、後円部北調査区(1-1トレンチ)で、器面が摩滅した円筒埴輪と家形埴輪の破片が少量出土している。他方、前方部に設定した調査区(1-3トレンチ)では埴輪片は出土していない。したがって、墳頂部に少量の円筒埴輪と家形埴輪等の形象埴輪類が配置されていたと考えられる。埋葬施設は粘土櫛と伝わるが、確認できていない。墳丘は地山を削りだすことによって成形している。前方部端と後円部端がそれぞれ大きく崩落しており、本来の墳丘規模の復原は困難だが、全長57mの前方後円墳と考えられる。

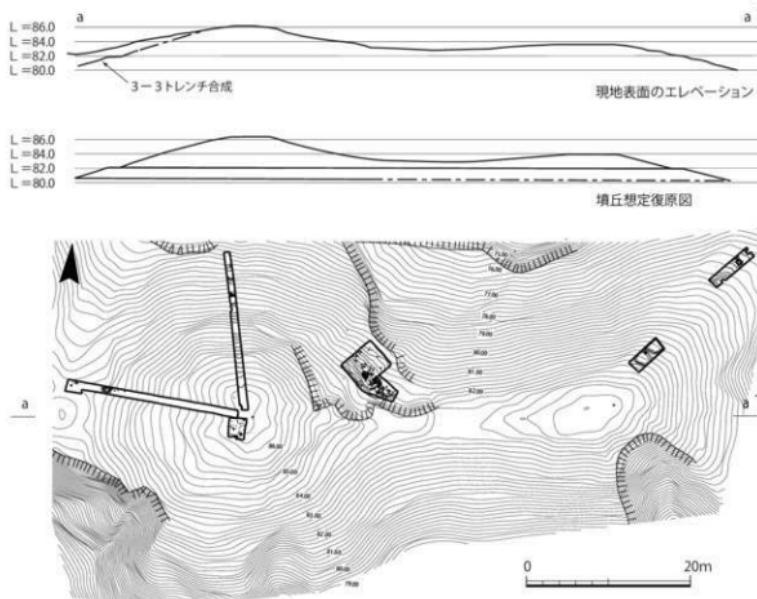
3号墳 3号墳は古墳群南東側に位置する。後円部の2ヶ所の調査区(3-1、3-2トレンチ)では、1段のテラス面と葺石の存在が明らかとなり、くびれ部調査区(3-3トレンチ)では円筒埴輪が原位置を保ったまま出土した。墳丘は、基本的には地山を削りだすことによって成形するが、墳



第36図 4号墳の墳丘 (1/600)



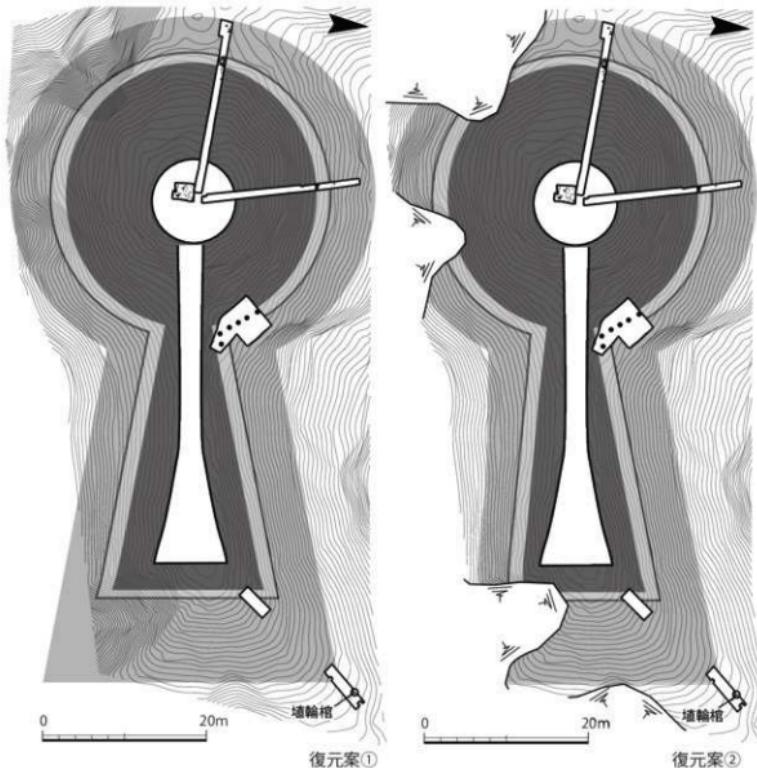
第37図 1号墳の填丘 (1/600)



第38図 3号墳の填丘 (1/600)

輪列付近や墳裾の一部には盛土も確認することができる。後円部は二段成形で、1段目の角度は約18度、2段目の角度は約17度である。多量の転落石があるが、原位置を保ったものは少なく、平坦面での基底石も存在しない。また、いずれの調査区でも2段目には明らかな葺石は認められず、流土中にも転落石はない。これが本来2段目には葺石が存在しなかったのか、あるいはすべて流失した結果かは不明である。後円部に対して、前方部は墳丘の依存状況に恵まれない。地山を削りだしたとみられる痕跡は確認しているが、これをそれぞれテラス面、墳裾部と見ると、後円部径約42m、全長約81.7mに復原することができよう。

墳丘の南側斜面には調査区を設定していないが、測量図を検討すると、北側と比較して等高線の密度が低く、大小の崖が認められることが分かる。この崖が本来の形状を反映しているとは考え難いが、地形の制約から、前方部は左右対称として造られていない可能性も考えられる。他の古墳の事例でも、古墳を見上げる平野部側はしっかりと墳丘や外表施設を作り、山側は省略するという事例もあること



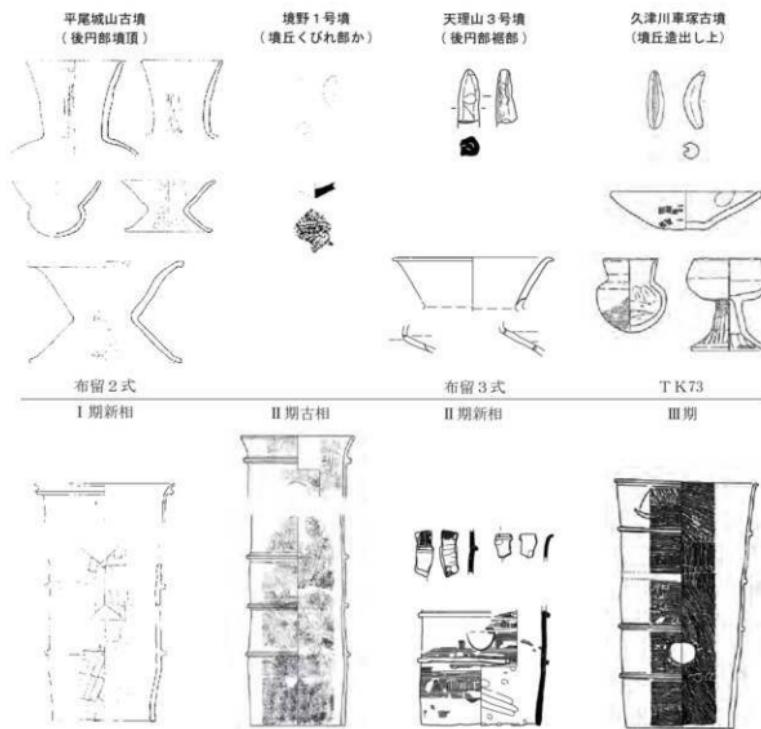
第39図 3号墳の墳丘復元案 (1/600)

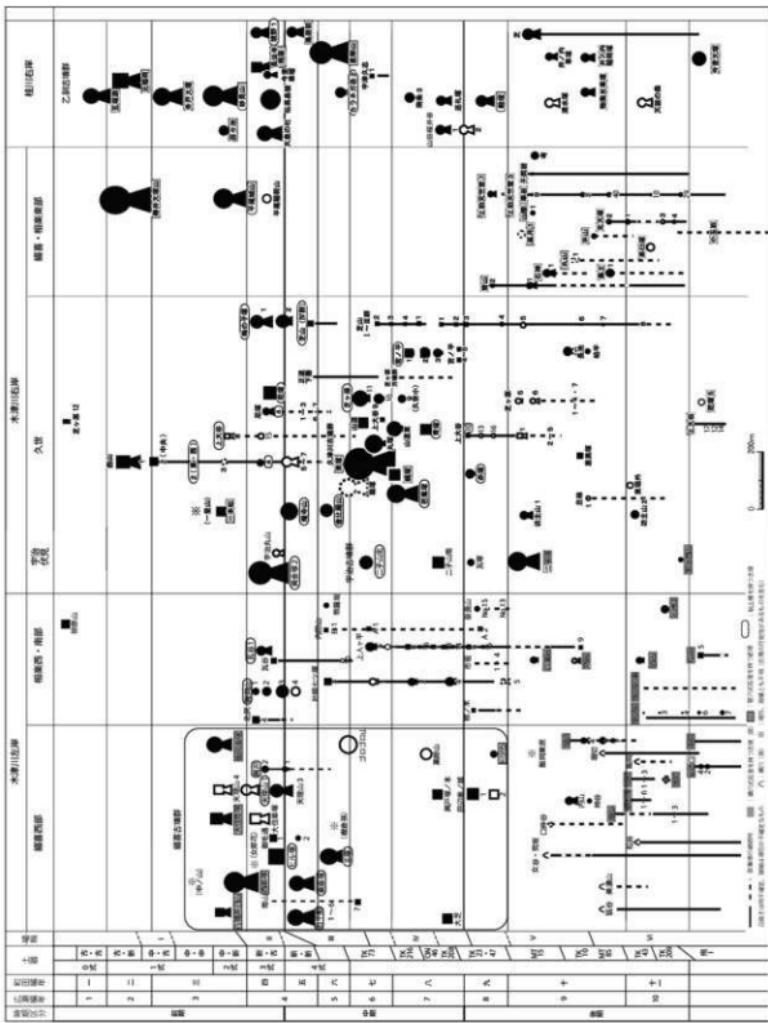
から、天理山3号墳でも平野部からの眺望を意識して、北側と南側の規格が異なっていた可能性も十分想定される。したがって、第39図には、2案の復元案を提示した。墳丘南側の構造や、埴輪の樹立位置等は今後の調査で解明していく必要がある。

(2) 天理山古墳群と木津川左岸の前期古墳の編年的位置付け

天理山古墳群の編年的位置づけ 古墳群の中で最古に位置づけられるのは4号墳である。4号墳は段築・埴輪列を有しない定型化以前の前方後方墳である。墓壙上面から出土した土師器の小片が唯一の出土遺物であるが、小形X字形器台とみられ、布留2式、集成編年3期後半が下限となる。

天理山3号墳は全長81mの前方後円墳で、外表施設として段築、葺石、埴輪列を備える。全形がわかる埴輪はないが、底部高が低い埴輪が出土しており、II期でも新しい段階に位置づけられよう。また、土師器は大形の無棱器台とみられる破片が出土している。当地域の集落では一般的な器種ではないが、布留3式～TG 232並行期とみられる。樹立埴輪列の間隔が広いことや古相の土製供物を





第41図 京都府南部の古墳と綴喜古墳群の位置（京都府教育委員会2022より）

有する点など前期的様相を各所に残しており、前期と中期の過渡期の古墳として位置づけられる。

1号墳と3号墳の前後関係は不明だが、1号墳は段築や葺石等の外表施設が認められないこと、埴輪の配置が限定向であることなどを根拠として、3号墳がやや後出する可能性がある。

なお3号墳墳裾から出土した土製供物は、模した対象ははっきりしないものの、古墳での祭祀行為の一端を示す遺物として重要である。土製供物や土器は古墳時代前期前半は墳丘上から出土することが多いが、古墳時代中期には墳丘造り出しなど墳頂部では用いられなくなることが知られている。古墳時代前期と中期の間に位置付けられる3号墳では、土製供物、土器とともに墳裾で出土しており、墳丘上での祭祀の場の変遷を考えるうえでは重要な遺物といえよう。

綴喜古墳群における天理山古墳群 当地域では、興戸5号墳下層墓や田辺城下層墓など畿内第V様式期の台状墓が検出されているが、それに続く庄内期の墓域は不明であり、前期前半（1、2期）にさかのぼる古墳もこれまで確認されていない。当地域で古墳築造が開始されるのは3期である。

飯岡車塚古墳では、周溝部の調査で原位置を保った状態で楕円筒埴輪が出土している。楕円筒埴輪は大住南塚古墳でも出土しているが、I期新相からII期古相にかけて認められる要素であることから、これらの古墳もほぼ同時期の築造とみて間違いない。八幡市域ではこの時期に茶臼山古墳が築造される。また、西車塚古墳も從来よりも埴輪が古相を示していることが明らかとなり、3期に遡る可能性がある。これら4基の古墳は、それぞれの小地域で初めての大型古墳である。天理山4号墳以外は埋葬施設に竪穴式石室を有し、段築、葺石、埴輪という外表施設を備えており、出現当初から畿内中枢部の影響下で築造された古墳であるといえよう。

続く4～5期に属する古墳としては、京田辺市域では天理山1・3号墳、大住車塚古墳、ゴロゴロ山古墳などを挙げることができる。大住車塚古墳は、大住南塚古墳に東接する前方後方墳で、立地から、大住南塚古墳に後続するものと考えられる。墳丘上には石材が散布しており、埋葬施設は竪穴式石室が想定されている。天理山古墳群の約2km東側では、棚倉孫神社では有黒斑でタテハケの円筒埴輪が市の立会調査で出土しており、周辺に5期の古墳の存在が想定できるほか、薪遺跡でも同時期の埋没古墳（薪高木1号墳）が検出されており、さらに周辺に中小型の古墳群が広がる可能性が高い。

以上のように、綴喜古墳群では、3期に大型古墳が出現し、4・5期に後続する古墳が2～3基築造された後、古墳群の築造を停止するという様相がそれぞれの小地域で認められることが分かる。また、4～5期には大型古墳だけでなく、中小型の古墳も多く認められる。これらは、古墳の築造動向あるいは、埋葬施設の頭位が東西主軸を志向することなど、綴喜古墳群にみられる共通の特徴と捉えることができよう。

これまで、綴喜古墳群は古い調査が多く、実態が不明な点が多かったが、天理山古墳群の調査により、その一端が明瞭になったということができるよう。

（桐井）

6 まとめ

今回の調査ではこれまで古墳時代中期～後期の古墳群とされてきた天理山古墳群が、古墳時代前期の前方後円墳 2 基、前方後方墳 1 基から構成される古墳群であることが明らかになった。1 号墳は後円部西側と前方部が元の形を留めていないが、3 号墳・4 号墳の遺存状況はともに比較的良好であるといえる。2 号墳は古墳の痕跡が確認できなかったことから、今後周辺の場所をさらに詳しく調査する必要があるだろう。3 号墳は後円部墳頂に埋葬施設が遺存している可能性がある。周辺地域で同時期の古墳である興戸 2 号墳の出土遺物から推測すると非常に多くの副葬品をもつ可能性があり、今後十分な調査・保護が必要となる。4 号墳は埋葬施設の平面プランやその遺存状態を確認することができ、水銀朱を検出するなどの成果を得た。

1・3・4 号墳は、その出土遺物や外表施設から 4 号墳→1 号墳→3 号墳の順に築造された可能性を考えられ、時期が新しくなるにつれ古墳の規模が大きくなることが分かる。また 1 号墳と 3 号墳は同じ尾根上に並列し、どちらも地山削り出して成形されているが、外表施設の構造が異なる。このような時期と規模、外表施設の差異は、群内の古墳同士の関係性だけでなく、ひとつの古墳群としての対外的な関係性を考える上でも重要な意味をもつだろう。

今回の調査では、古墳の分布や墳形・規模を確認するための必要最低限の調査場所に限られたため、今後さらに詳細な調査が必要である。特に 1・3 号墳においては今回の調査では墳丘北側に調査区が限られたため、墳丘南側においても調査を行い、比較検討を行う必要がある。今後も調査を引き続き行い、天理山古墳群の性格をさらに明らかにしていきたい。

(上野)

【参考文献】

- 諫早直人・馬渕一輝 2021 「京田辺市トヅカ古墳出土遺物の再検討」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』7、京都府立大学文学部歴史学科
- 岩本 崇 2020 「三角縁神獣鏡と淀川左岸地域における首長墓の展開」『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 宇野隆志 2019 「八幡茶臼山古墳出土の埴輪について」『山城郷土資料館報』第 26 号、山城郷土資料館
- 梅原未治 1920 「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史跡勝地調査會報告』第二冊、京都府
- 梅原未治 1921 「大庄村車塚古墳」『京都府史跡勝地調査會報告』第三冊、京都府
- 梅原未治 1938 a 「山城飯岡トヅカ古墳」『日本古文化研究所報告』九、日本古文化研究所
- 梅原未治 1938 b 「山城飯岡車塚古墳」『日本古文化研究所報告』九、日本古文化研究所
- 梅原未治 1938 c 「山城飯岡車塚古墳出土品」『奈良帝室博物館歴史図録』5、奈良帝室博物館
- 梅原未治 1955 「山城における古式古墳の調査」『京都府文化財調査報告』第廿一冊、京都府教育委員会
- 梅本康広 2003 「山城の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第 5 号、埴輪検討会
- 梅本康広 2012 「摂津・山城」『古墳時代の考古学』2 古墳出現と展開の地域相、同成
- 梅本康広 2021 「南山城の古墳時代研究の最新動向と課題」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳

- 時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 江谷 寛ほか 1985『八幡市誌』第1巻、八幡市
- 大洞真白編 2010『王塚古墳範囲確認発掘調査(第1～3次)報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 54 集、八幡市教育委員会
- 片岡 肇 1991 京都府田辺町十塚古墳の発見と保存の経緯について』『朱雀』京都文化博物館調査研究紀要第 4 集、京都文化博物館
- 川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号、日本考古学会
- 北山大熙 2017『埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳』『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学文化遺産専攻
- 北山峰生 2011『古墳時代前期における石棺の移動』『石材の移動とその背景 弥生～古墳時代を中心に』第 60 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会
- 京都府教育委員会編 2022『綾喜古墳群調査報告書』
- 小泉裕司ほか 1999『西山古墳群』『城陽市史』第 3 卷、城陽市史編さん委員会
- 下垣仁志 1996『本館所蔵の八幡東車塚古墳出土鏡』『泉屋博古館紀要』第 21 号、泉屋博古館
- 下垣仁志 2021『男山古墳群の動向』『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 末永雅夫 1944『日本上代の甲冑』創元社
- 鈴木重治 1994 a「飯岡トヅカ古墳出土神人車馬画像鏡抄考」『田辺文化』創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 鈴木重治 1994 b「飯岡遺跡群の発掘調査などのあゆみ」『田辺文化』創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 鷹野一太郎編 1986『大住南塚古墳発掘調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書第 6 集、田辺町教育委員会
- 鷹野一太郎編 1987『大住南塚古墳発掘調査概報』Ⅱ、田辺町埋蔵文化財調査報告書第 7 集、田辺町教育委員会
- 鷹野一太郎編 1995『興戸遺跡第 12 次・興戸古墳群発掘調査概報—関西電力高島線鉄塔建替地の調査—』田辺町埋蔵文化財調査報告書第 19 集
- 高橋美久二 1970「相楽・綾喜両郡内遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1970)』京都府教育委員会
- 高橋美久二 1971「相楽・綾喜両郡内第二次遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1971)』京都府教育委員会
- 田中勝弘 1970「古墳時代前期における山城盆地」『史想』第 15 号、京都教育大学考古学研究会
- 田辺郷土史会編 1959『田辺郷土史』古代篇
- 田辺町 1968『京都府田辺町史』
- 辻川哲朗 2003「突堤—突堤設定技法を中心として」『埴輪—円筒埴輪製作技術の観察・認識・分析—』第 52 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集) 埋蔵文化財研究会
- 中村直勝ほか編 1936『八幡史蹟』京滋探遊会
- 西田直二郎 1951『洛南大住村史』
- 肥後弘幸 2021『弥生墳墓と初期前方後円墳』『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト

- 王権一『季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 廣瀬 覚 2015「王権周縁部における埴輪の受容と展開」『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 広瀬和雄 2021「南山城の古墳と王権—木津川流域の前方後円墳をめぐって—」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 福永伸哉 2005「三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡のはざまで」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学大学院文学研究科
- 福永伸哉 2008「古墳出現期の大和川と淀川」—古市古墳群成立前史をめぐって—『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成 17 ~ 19 年度科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書、奈良大学文学部文化財学科
- 古川 匠 2017「山城地域の古墳時代集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第 14 集、同志社大学歴史資料館
- 桜井豊成 1991「石不動古墳発掘調査概報」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 9 集、八幡市教育委員会
- 村田太平 1955『郷土田辺の歴史と傳説』私家版
- 森本六爾 1925「二・三の埴輪と一古墳に関する新資料に就て」『考古学雑誌』第 15 卷 2 号、考古学会
- 森本米一 1954『綾喜郡史話』私家版
- 八十島豊成 2004「ヒル塚古墳範囲確認調査（第 3 次）」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 37 集、八幡市教育委員会
- 八十島豊成 2006「美濃山王塚古墳墳丘測量調査概要報告」『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第 40 集、八幡市教育委員会
- 八十島豊成編 2007『美濃山王塚古墳発掘調査報告』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告第 46 集、八幡市教育委員会
- 山中一郎・上原真人・村上 隆・塚本敏夫・高橋克壽・森下章司 1997「八幡大塚古墳」『王者の武装—5 世紀の金工技術—』京都大学総合博物館
- 山本 亮 2021「山城地域からみた前期前方後方墳の性格」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群—南山城の古墳時代とヤマト王権—』季刊考古学・別冊 34、雄山閣
- 八幡町役場 1938『八幡町誌』八幡町
- 吉村正親編 1976『飯岡車塚古墳発掘調査報告（周溝部調査）』綾喜古文化研究会
- 吉村正親 1994『飯岡古墳群ノート』『田辺文化』創刊号、田辺の文化財を学ぶ会
- 龍谷大学文学部考古学資料室 1972『南山城の前方後円墳』
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 卷第 2 号、考古学研究会
- 和田晴吾 1988「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域史研究』4、立命館大学人文科学研究所
- 和田晴吾 1992『山城』『前方後円墳集成』近畿篇、山川出版社
- 和田晴吾 1994「古墳築造の諸段階と政治的階層構成—5 世紀代の首長制的体制に触れつつ—」『古代王権と交流』6 大和王権と交流の諸相、名著出版

付表1 塙輪観察表

編号 番号	出土位置 出土地点	器種	部位	残存高 (cm)	調整(外面)	調整(内面)	色調	胎土	構成
1	1-5tr	普通門面埴輪	胴部	8.6	不明	ナデ	7.5YR8/8 黄相	やや粗	軟
2	1-1tr	普通門面埴輪	胴部	7.1	ヨコハケ、ナデ	ヨコハケ、ナデ	2.5Y7/3 浅黄	粗	堅硬
3	1-1tr	普通門面埴輪	胴部	4.7	ヨコハケ?	オサエ	7.5YR7/6 相	やや粗	軟
4	1-1tr	普通門面埴輪	胴部	5	タテハケ	タテハケ	2.5Y7/4 浅黄	やや粗	堅硬
5	1-1tr	形象埴輪 家(壁・屋根)	6.9	ナデ?	ナデ?	10YR7/4 にじい黄相	やや粗	やや軟	
6	1-1tr	形象埴輪 家形部	5.1	ナデ	ナデ	2.5YR7/6 相	粗	やや良好	
7	3-3tr	円筒埴輪	口縁部	3.8	ヨコハケ→ナデ	ナデ	10YR7/4 にじい黄相	やや粗	やや軟
8	3-3tr	円筒埴輪	口縁部	2	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄相	やや粗	軟
9	3-3tr	円筒埴輪	口縁部	7	ナデ、オサエ	オサエ	5YR7/8 相	粗	軟
10	3-3tr	円筒埴輪	胴部	8.3	ナナメハケ	ナデ、オサエ	7.5YR7/8 黄相	やや粗	やや軟
11	3-3tr	円筒埴輪	胴部	3.9	ヨコハケ	ヨコナデ	10YR7/4 にじい黄相	やや密	やや軟
12	3-3tr	円筒埴輪	胴部	4.9	不明	不明	10YR8/4 浅黄相	やや粗	やや軟
13	3-3tr	円筒埴輪	胴部	5.2	ヨコハケ	タテハケ→オサエ	10YR8/6 黄相	やや粗	軟
14	3-3tr	円筒埴輪	胴部	9.9	不明	ナナメハケ	10YR8/4 浅黄相	やや粗	軟
15	3-2tr	円筒埴輪	胴部	9.5	ヨコハケ	オサエ	10YR8/3 浅黄相	やや粗	良
16	3-1tr	円筒埴輪	胴部	5.4	ヨコハケ	ナデ	5YR7/3 にじい相	やや粗	やや軟
17	3-2tr	円筒埴輪	底部	7.5	タテハケ	タテナデ、オサエ	2.5Y7/4 浅黄	粗	やや軟
18	3-3tr No.2	円筒埴輪 底部~2条目	35.3	タテハケ、ヨコ ハケ	オサエ、 ナナメハケ、ヨコナデ	5YR7/6 相	やや粗	やや軟	
19	3-5tr	側面形埴輪	口縁部	3.3	ナデ	ナデ	2.5YR7/6 相	やや粗	軟
20	3-3tr	側面形埴輪	口縁部	4	ナデ	ナデ	5YR7/4 にじい相	やや粗	軟
21	3-3tr	側面形埴輪	側面	2.4	ナデ	オサエ	7.5YR7/6 相	やや粗	軟
22	3-3tr	側面形埴輪	側面	4.1	ナデ	オサエ、ナデ	7.5Y7/4 にじい相	粗	軟
23	3-5tr	側面形埴輪	胴部	5.2	ナデ	ヨコハケ	5YR7/6 相	やや粗	やや軟
24	3-3tr	側面形埴輪	胴部	6.5	タテハケ ヨコハケ、ナデ	ハケ、ナデ	7.5YR7/6 相	やや粗	軟
25	3-5tr	埴輪	不明形態	4.9	線刻(棘彫文)	不明	5YR7/3 にじい相	やや密	良好
26	3-5tr	埴輪相	蓋か	6.3	ヨコハケ	ナナメハケ	10YR7/4 にじい黄相	やや粗	やや軟
27	3-5tr	埴輪相	胴部	6.7	不明	ヨコナデ、タテナデ	2.5YR7/6 相	粗	やや軟
28	3-5tr	埴輪相	胴部	14.1	タテハケ	タテナデ、ヨコナデ、 オサエ	5YR7/6 相	やや粗	軟
29	3-2tr	形象埴輪 家形または倒 壊形	6	ナデ	ナデ	5YR7/6 相	やや密	やや軟	
30	3-3tr	埴輪	胴部	6.1	ナデ	ナデ	7.5YR7/8 黄相	やや粗	やや軟
31	3-3tr	埴輪	不明	6.3	ナデ	不明	2.5Y8/6 黄	やや粗	軟
32	3-2tr	土師器	口縁部	6	不明	不明	10YR7/4 にじい黄相	粗	軟
33	3-2tr	土師器	底部	2	不明	不明	10YR8/6 黄相	粗	堅硬
34	3-2tr	土師器	底部	2.8	ナデ	不明	10YR8/6 黄相	粗	堅硬
35	3-3tr	土製模造品 アケビまたは マメ	6.5	ナデ、オサエ	-	7.5YR7/6 相	粗	堅硬	
36	4-4tr	土師器	底または小型 器台か	2.5	不明	不明	10R6/6 赤相	やや密	軟

図 版

図版第1 天理山1号墳



(1) 1-1 tr (北から)



(2) 1-2 tr (西から)

図版第2 天理山1号墳



(1) 1 - 3 tr 土層断面
(北東から)



(2) 1 - 4 tr 全景 (北から)



(3) 1 - 5 tr 土層断面
(北西から)

図版第3 天理山3号墳



(1) 3-1tr (北西から)



(2) 3-2tr (西から)

図版第4 天理山3号墳



(1) 3-2 tr(西から)



(2) 3-3 tr(東から)

図版第5 天理山3号墳



(1) 3-3tr 墳輪列断面
(北から)



(2) 3-3tr 墳輪 No. 2
(北西から)



(3) 3-4tr (北東から)

図版第6 天理山3号墳



(1) 3-5tr (北東から)



(2) 3-5tr 墳輪箱

図版第7 天理山4号墳



(1) 4-1 tr (北東から)



(2) 4-2 tr (北東から)



(3) 4-3 tr (西から)

図版第8 天理山4号墳



(1) 4-4 tr(南西から)



(2) 4-4 tr(南西から)



(3) 4-4 tr(東から)

図版第9 天理山2号墳・周辺の調査



(1) 2-1 tr (東から)



(2) 2-2 tr (北から)



(3) 2-3 tr (南から)

図版第10 周辺の調査



(1) 2-4 tr (北から)

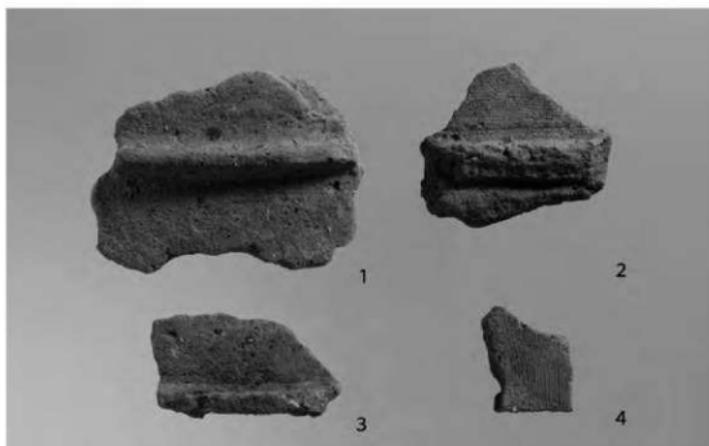


(2) 2-4 tr 断割後
(北から)



(3) 2-4 tr 断割内
(西から)

図版第 11 出土遺物



(1) 1号墳出土埴輪

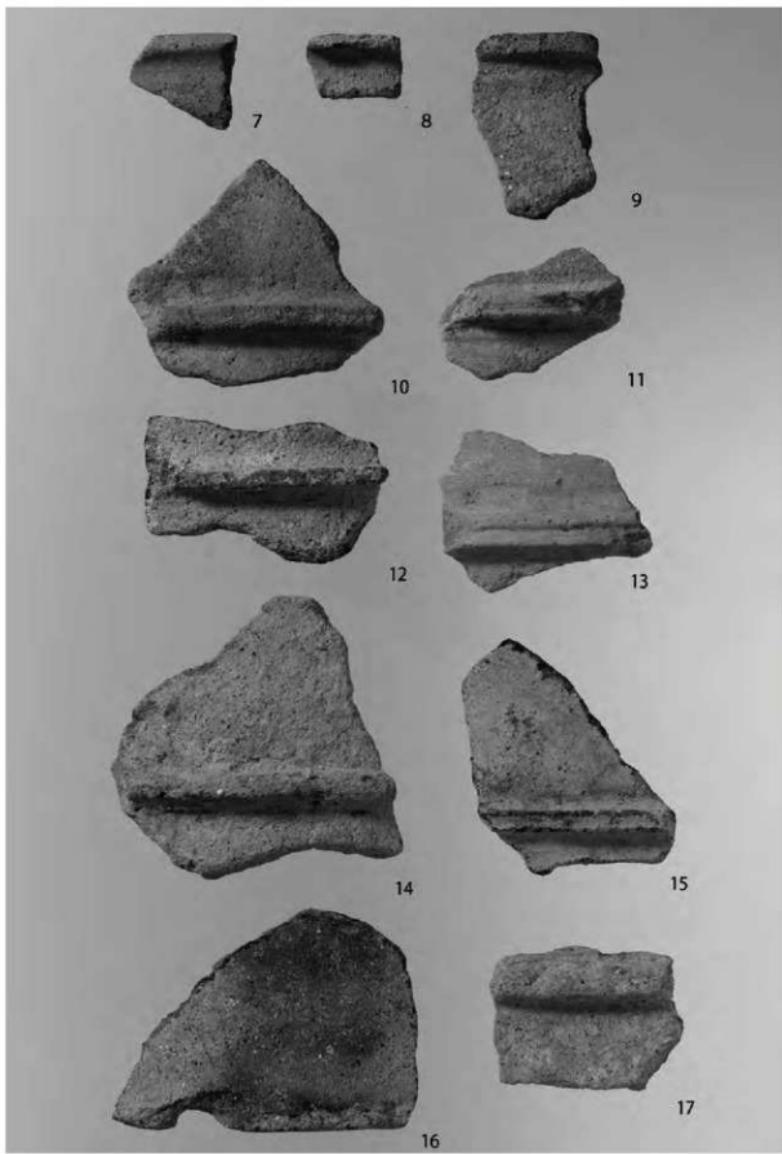


(2) 1-1 tr 出土家形埴輪



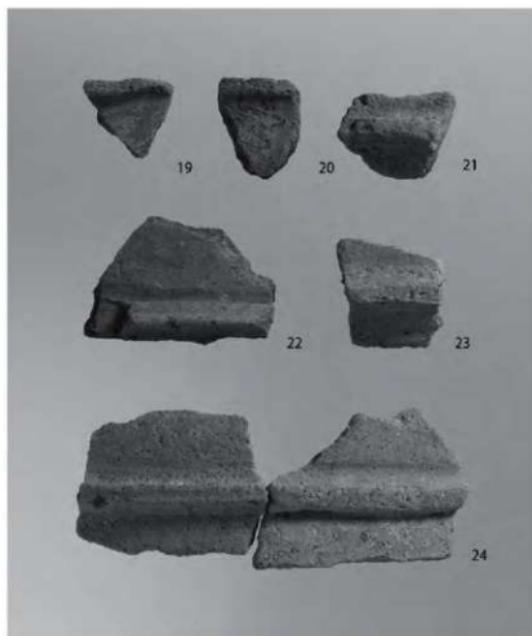
(3) 1-1 tr 出土家形埴輪

図版第12 出土遺物



(1) 3号墳出土円筒埴輪

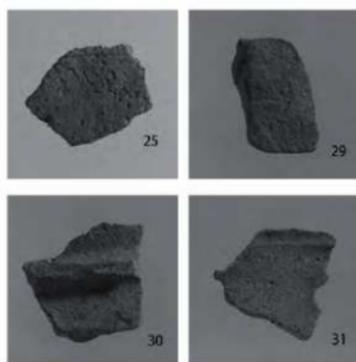
図版第13 出土遺物



(1) 3号填出土朝顔形埴輪

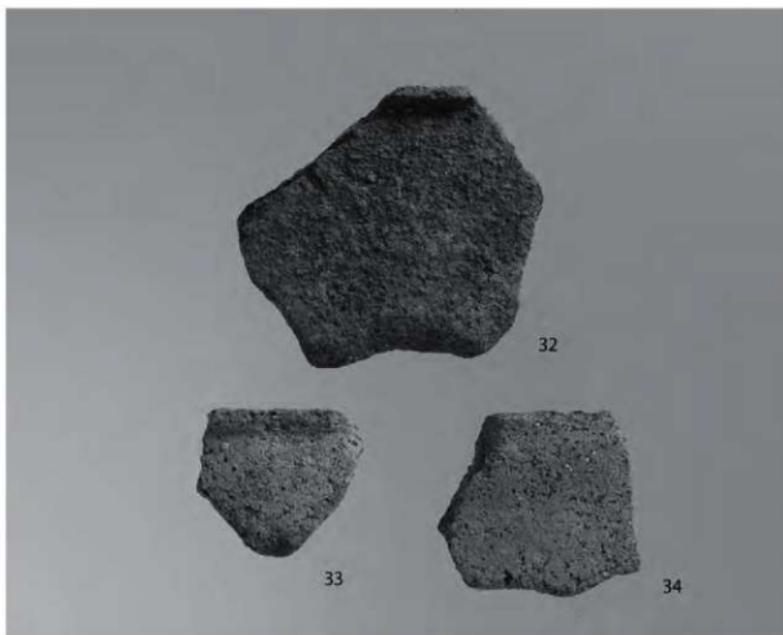


(2) 3号填 (3-5 tr) 出土埴輪



(3) 3号填出土埴輪

図版第14 出土遺物



(1) 3号墳3-2 tr出土土器



(2) 3号墳出土土製品



(3) 4号墳(4-4 tr)出土土器

報告書抄録

天理山古墳群発掘調査報告書

発行 令和4年3月31日

編集 京田辺市市民部

文化・スポーツ振興課

発行 京田辺市

〒 610-0393 京都府京田辺市田辺 80

印刷 株式会社京阪工技社

〒 573-1192 大阪府枚方市西禁野2丁目4-18

